ワンピース～俺の推しが女体化してるんだが？～

ジャミトフの狗

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

思い付きで書いたロー女体化ｓｓ。

思い付きなのでタグもどんどん増えていきそう。

目次

プロローグ ―― 1
プロローグ2 ―― 7
プロローグ3 ―― 15
プロローグ4 ―― 22
プロローグ5 ―― 30
シャボンディ諸島編1 ―― 42
シャボンディ諸島編2 ―― 50
シャボンディ諸島編3 ―― 57
シャボンディ諸島編4 ―― 67
シャボンディ諸島編5 ―― 80
シャボンディ諸島編6 ―― 91
シャボンディ諸島編7 ―― 102
シャボンディ諸島編8 ―― 111
インペルダウン編1 ―― 118
インペルダウン編2 ―― 125

プロローグ

トラファルガー・ローにとって、幼少期は怒涛の日々だったと言って差し支えないだろう。

白い町と揶揄されるフレバンスという国でローは医者の子として生まれた（白い町という名前の由来は珀鉛という白い鉛が大量に掘れたからだそうな）。ローは幼少のころから医学を学ぶ聡明な子供だった。また父と母、妹の四人家族で大きな病院を営んでいたことから、相当裕福な家庭であったことは想像に難くない。

珀鉛には毒素が含まれている、そのことを世界政府は早期の内に突き止めていた。しかしそこは流石ワンピース特有の無能畜生価値観と言うべきか、金に目のくらんだ者たちによってその事実が公表されることはなかった。

後に珀鉛病と呼ばれる中毒は肌や髪を白色化させ、人を死に至らせる不治の病であった。更には発症が遅れて一斉に発生する上に、その特徴から感染症であると誤認されたためか治療法はついぞ確立される事はなかった。非常に質の悪い中毒と言えるだろう。

しかし最も凄惨と言えたのが、世界政府の対応である。

簡潔に述べてしまえば、フレバンスそのものを滅ぼすことで珀鉛病の根絶を図るとい

う物だった。現代日本に住む人々からすれば俄かには信じられないだろう。まさにワンピースクオリティ。やることが大胆でクズい。正直ドン引きである。

フレバンスに住む者たちは、そのことごとくが死に絶えた。珀鉛病で死ぬ者よりも虐殺によって殺された人の数の方が多かった可能性すらある。虐殺の対象には当然ながらロー自身やローの友人、家族も含まれていた。

結果、フレバンスの住人はロー以外誰一人としていなかった。そのローですら珀鉛病を患っており、そう長くはなかったという。そのことはロー自身もなんとなく理解していたのだろう。

ローは死体に紛れながらフレバンスから逃れ、ある海賊団の門を叩いた。すべてを壊したい、そんな歪んだ願望を抱いていたまだ十歳の子供に同情したのか、それとも興味が湧いたのかその海賊団の頭はローを迎え入れた。

その海賊団は決して優しかったわけではない。むしろ逆に、苛烈なまでに幼いローを鍛え上げた。殺しの技術、そのすべてを海賊団総出で叩き込まんとしたのだ。残された寿命が少ないローにある意味英才教育を施したのは海賊団の頭の意向だったことに他ならない。そこにどんな思惑があったのかは俺の預かり知るところではない。

海賊になって数年経ち、ローはすっかり海賊として己のアイデンティティを確立してしまった。少なくとも何かを殺そうとすることに、何かを傷つけることに何の抵抗も示

さなくなってしまったのである。そんな最中、ローが同世代の仲間に自身の忌み名を告げたことをきっかけに、彼の人生は大きな転機を迎える。

結論だけを述べると、ローは大切な人を失う代わりに珀鉛病を完治させた。そこまでの過程はあまりに複雑で、長丁場となるため詳しく語ることは出来ないが、簡潔に述べると例の海賊団の部下がローの病を治すために海賊団を裏切った。その結果、海賊団の頭の怒りを買い、病完治の手段を手に入れたもののその部下は頭に殺される。そういう筋書きだったはずだ。

そんな壮絶な人生を送ったロー本人が今、俺の前にいる。たぶん。

「ふう、ご馳走様。なかなかおいしかったわ」

ただし、俺の知っているトラファルガー・ローは決して女の子ではない。

★

ＯＮＥ（ワン）　ＰＩＣＥ（ピース）、日本人なら内容は知らなくとも名前だけは聞いたことがあるであろう世界的に有名な漫画。１７世紀における海賊の黄金時代をモチーフにした世界観が特徴的で、そこに悪魔の実という超能力や空想上の生き物に化け物、とにかく何でも

詰め込んだ面白可笑しい物語である。
俺自身、滅茶苦茶詳しいというわけではないが、アニメを見たり友人と映画を見に行ったりした。一度単行本を全て揃えた友人の家に赴き、読破したこともある。なんだかんだ言って好きな作品であった。
その中でもかなり好きだったキャラクターにトラファルガー・ローがいた。残忍で冷淡、でも時折見せる不器用な優しさが個人的にツボだったのである。それが、どうして

「で、そろそろ聞かせてもらってもいいかしら？　どうして助けてくれたのか」
どうして女の子になっているのか。
いや、最初はローではないと疑ったのだ。しかし彼女はローのトレードマークと言えるファー付きの帽子をかぶってるし、何より目の前でオペオペの能力を行使していたのだ。なんなら容姿もどことなくローっぽい雰囲気があるような気がしなくもない。
一応ちょん切らなくとも性転換させる悪魔の実（食べると超能力を発現させる不思議な果実）の能力者はいたはずだが、彼（もしくは彼女）とローがあの時期に邂逅できるはずもない。というか彼（もしくはｒｙ）が性転換させる理由がないし。付け加えれば口調も違和感なく女の子だし。まぁ漫画の世界に前世の知識を持ちながら生まれてきてる時点で、その程度の差異など気にする必要もないというか、マジで些細というか。

「……話しかけているのだから、返事をするのが礼儀でしょう」
食事を終え箸を丁寧に茶碗の上に置きながら、上手に不機嫌そうな顔をする暫定ロー。
「野良犬に死体かどうかも分からない物をくれてやる必要もないだろうさ」
「そう」
疑いの目は消える事ないが、ひとまず納得はしてくれたらしい暫定ロー。
「こちらからも聞かせてほしい。何故洞窟で倒れてたんだ」
「成り行きよ」
どんな成り行きだって言いたくなるが、たぶん嘘はついてないのだろう。現に彼女は辺りに血をまき散らしながら洞窟で倒れていた。正確には俺が暫定ローを最初に目撃した時、恐らく彼女は珀鉛病の治療を己に施している最中だったのだろう。そして数時間にも及ぶオペを終えて気を失った彼女を、流石にそのままにするのも憚られこうして我が家まで抱えて持ってきたという次第である。
　時系列的にはコラソンがフラミンゴ野郎に殺された後と見ていい。となると彼女は命からがらここまで歩いて来たって事になる。確かに最近スワロー島には軍艦が来ていた。辻褄は合うと考えられるが、どうだろう。
「……帰る場所はあるのか」

答えは分かり切っていたが、それでも聞くことが自然であるように感じた。
「いいえ」
きっぱりとした口調に肝が据わった顔。あれだけ修羅場をくぐったらそりゃあ度胸は良くなるってもんか。なんというか、試すような真似をして後ろめたい。
「そうか、なら暫くここを使うといい。嫌だったら別にいい、好きにしろ」
俺の言葉が意外だったのか、ぽかんと口を開けて間抜けな表情をする。それが少し面白くて「ふん」と鼻で笑ってしまった。やべ、ちょっと感じ悪いかも。

プロローグ2

転生してから早期の内に、俺はこの世界がワンピースであるということに気づいた。ニュース・クーなんて代物、ワンピにしかないだろうし、その新聞にはセンゴクやガープ、果てにはニコ・ロビンと聞きなじみのある名前ばっかり出てくるものだから特定は容易だった。

誤算と言えば、俺が海賊の子であったという事。生まれた瞬間から自我を確立した俺は男ばかりのむさ苦しい海賊船で育った。まず言葉を覚え、文字を覚えるところから始まった。俺がある程度大きくなると、周囲からはやれ才能があるだの天才だのと持て囃してきたものだ。正直居心地は悪くなかったし、むしろ楽しかった。ワンピの海賊にしては皆気のいい人達ばっかりだったというのもある。

しかしある日、嵐に直撃した俺たちの海賊船は文字通り木っ端みじんなった。そこで何とか木片にしがみつくことが出来た俺はかろうじて生き残れた訳だが、今度は広い海で漂流することになる。皆がどうなったのかは残念ながら分からない。ただ、本当に心細かったことを覚えている。

嵐が去ったばかりなせいか、カンカン照りな上に食料がない。日に焼けながら俺は木

片の上で海を漂い、そうして死ぬのだろうと悟り始めた時、俺は今にも沈みかけそうな船を発見した。今思えば、その船も同じ嵐に見舞われてしまったのだと思う。

何かあるかもしれない。だから俺は片っ端から船をあさった。しかし見つかったのは少量の食料とかなりの量の金銀財宝。恐らく商船か何かだったのだろうと、その時思った。ただこの広い海で遭難したら宝物なんて何の価値もないわけで、俺からしたらそれらはゴミ同然だった。

なけなしの食料で二日ほど、その沈みかけの船で過ごした。しかし当然、都合よく誰かが通りかかるという事はなかった。一応その時に木材で火を起こして狼煙を上げてみたり、金の延べ棒を叩いて音を出したり、できる限りの事はした。無論、それらの行為が功を奏することはなかった。

――二度目の人生がこんな呆気なく終わる

それがたまらなく怖かった。どうせなら、一度目よりも楽しい人生にしたい。そういう願いがあったのだ。現代日本では味わう事がなかった冒険に、存分に心が惹かれていたのだ。だから、死にたくないと、切に思った。

どうせ死ぬならと、俺は最後にこの船を燃やそうとした。自暴自棄になったのではない。後に引けない状況にすることで、覚悟を決めようと考えたのである。しかし、その前に俺はもう一度財宝が置かれていた部屋に向かった。その行動には一つだけ、ほんの

小さな願いがあった。

部屋にはいくつか鍵のかかった宝箱がある。どうせその中にもお金や黄金しかないのだろうと高をくくって、結局開けないでいた。俺はとにかく力業で宝箱を開けた。というか、南京錠付きだったから木箱そのものを壊すことにした。中身はどれもこれも黄金ばかりで、正直無駄に体力を使ってる気持ちしかしなかった。そして最後の宝箱も壊そうと持ち上げたとき、ソレはやけに軽かった。

もしかしたら、そういう気持ちがあった。他の宝箱と同様に頑丈であったため、かなりの時間を要したがそれでも何とかこじ開けることに成功すると、中身はパイナップルの表面に羽毛が付いたような奇妙な果物があった。

――――ビンゴ!!

その時久しく笑った気がする。すぐさま俺はその果物にかじりついた。すると口の中で化学反応が起こった。有体に言うとクッソ不味かった。吐き出しそうになるのを堪え、一気に飲み込む。本当に、汚泥や嘔吐物を食べたかのような心地だったが、これも食料には間違いないわけでして。だから俺は完食した。

俺の予想通りなら、何かが起きるはずである。手から何か出ないかなぁと手をぐっと突き出したり、ジャンプしてみたり、とにかく思いつくことはなんでもした。何なら金の延べ棒を頭にぶつけたり、それを投げ飛ばしたりもした。とにかく意味不明を事を続

けるうちに、俺は鳥になった。

嘘ではない。本当に俺は鳥になったのだ。体は掌サイズにまで小さくなり、鳴き声は「ちゅん」と可愛い。

勝ったな、と。そう思った。まず変態した鳥がツバメだったのがよかった。飛行能力に優れていたためか、初めて飛ぶのにも関わらず、休まずに長い時間をかけて島に辿りつく事が出来た。あと金の延べ棒が倒れた位置に進んだのも勝因の一つだろう。

そうして俺は何とか生きながらえる事が出来た。幸運のオンパレードばかりで、今でもよく助かったなぁと思う。

ただここでも誤算があった。というのも俺がツバメから人間に戻るところを誰かに見られたみたいなのだ。だからか、島の住民からは化け物扱いされてしまう。ワンピースの世界って色んな意味ですっごい極端だったことをこの時に思い出した。いや、とはいえいきなり鳥が人間になったらさすがに気味悪いか？　でも石を投げるのはやりすぎだと存じ上げます。というか極限状態の人間によくそんな事出来るなーとか、極限状態の頭でなんとなしに思った。

そういう人たちの中にも俺を迎え入れてくれる人はいた。その人は老齢の体躯の小さな男性であった。彼はただ一言「くるか？」と、それだけを聞いてきた。断る理由がないため俺は何度もうなずくと、老人は「ついてこい」と告げて山に入っていった。大

人しくついていくと、失礼ながら中々に貧相な山小屋があった。彼はその時「勝手に住め」と、やはり不愛想に言葉数少なく言った。

それから、俺はその山小屋に住むようになった。老人はどうやらこの山に住んで久しいようで、食べられる植物やその採集の仕方に詳しかった。驚いたのが、素手で動物を狩猟する術をその老人が持っていたことだ。目の前でクマを絞め殺す様を見た時は、流石にビビった。無論、俺は即師事した。因みに我流の拳法だったらしく、あえて名前を付けるとすると「熊殺拳」らしい。そのまますぎてビビる。

そうやって山に生きること数年。そろそろ山での生き方も慣れた始めた矢先に、老人が床に臥せた。彼は老衰だというが、それを認められるほど俺は達観していない。彼を背負い街の医者に診せた。その時には街の住人からの信頼を勝ち取っていたから（その多くは老人のおかげなのだが）、快く診療してもらった。しかし診断結果は老人の言う通り老衰だった。

これ以上語るのも野暮だろう。俺は山小屋で彼の最期を看取り、彼の望むように山で遺体を燃やした。

それから更に数年、俺が18歳になってから。何となく海の幸を晩飯にしたいと思った俺は、よく貝を採りに訪れる洞窟へと向かった、そういう次第だ。

★

予想通りと言うべきか、あの娘はやはりトラファルガー・ローだった。

あれから我が家というには少し恥ずかしいボロい小さい古いの三拍子が揃った山小屋にロー子は住み着くようになった。なんか親近感を覚える。彼女はどういう経緯か、いつの間にか喋る白クマを助け、悪ガキ二人を子分にしていた。また、その一匹と二人のガキ以外にもロー子は街外れに住むじいさんとも仲良くなっていた。あんまり接点がないのでそのじいさんがどんな人柄なのかは計りかねる。ただ、ロー子がなついているんだから悪い人ではないのだろう。

たまにロー子がその白クマと悪ガキたちを我が山小屋に連れてくるので、ご飯を振舞ったりトランプで遊んだりした。この世界に転生（で合ってるのかはどうかは分からないが、便宜上このように呼称する）してから、極力他人と関わらないようにしてきた俺ではあるが、精神的な年齢が離れていたとしてもやはり人とのコミュニケーションは楽しいもので、つい皆を甘やかしてしまった。すると皆めっちゃ懐いてくれて、それがまたクッソ可愛かった。特にシロクマ君は愛でれば愛でるだけかわいい反応をするので好きです。

さて、ロー子が我が家に住み始めて早一年。最近の悪ガキ四人衆は街に出て、しっかりバイトでお金を稼いでいる。おそらくは例のじいさんが手配してくれたのだと思う。やはり親近感を覚える。それに比べて俺はずーっと山にこもっては、丸太に拳を打ち続ける日々である。一応、家事は自分一人で出来るからセーフだと思いたい。

「ただいま」

年相応の幼い声と同時に、ロー子が帰ってきた。したがって、俺も———

「おかえり」

と、いつものように呼応する。どうやらロー子はこの掛け合いをとても好ましく思っているようで、疎かにするとすごく不機嫌になる。なんとなく、理由は分かるような気もする。

「晩飯は出来てる。風呂も沸いてる。どうする」

「先にすっきりしたいから、お風呂入ってくる」

「あいよ」

これは俺のこだわりであるが、山小屋と言えばドラム缶風呂である。だから不便ではあるが我が家のお風呂はこの山小屋とは別の小屋にある。ロー子はささっと支度して、部屋から出ようとする。

「ほれ、また忘れてるぞ」

タオルを投げ渡す。今月になって二度目だ。女の子なんだからそこらへんしっかりなさい。将来困るわよ！　それでなくとも綺麗な顔立ちしてるんだから。

「…ええ、助かるわ。ありがとう」

全く、俺が肉体相応の精神してたら押し倒されてるかもしれないってのに。なんというかロー子は貞操観念的なところで危機感が薄い。それがフラミンゴ野郎のところに長い間いたからだとすれば、それはお前罪深いぞ。というか、年ごろの男と女が同じ屋根の下で暮らしてるって、よくよく考えるとやべぇな。

あれ？

「…え、待って。俺ってもしかして相当不味い事してない？」

プロローグ3

ある日の昼下がり、いつもの山小屋にて。

「戦い方を教えてほしいだって？」

「ええ、貴方熊を素手で倒せるんでしょう？」

唐突になんか難しそうな本を読みながら「戦い方を教えてほしい」と乞うてきたロー子。因みに診療所のバイトは今日は非番らしい。

後に億越えの海賊となり、コラソンの敵討ちをしたい彼女。だからそういう話をいつかはしてくるかもしれないと、予想はしていた。原作をある程度覚えている俺としては、彼女の要求に二つ返事で了承したい気持ちがあるにはある。しかし――

「なぜ俺がそんな事をしなければならない」

あくまでもロー子にとって俺は、住む場所を提供しているだけの男、である。当然ながら彼女の過去を俺は聞いてないし、そもそも武術を教えてやる義理もない。大体、ドフラミンゴの一味だった時に、それこそ散々『戦い方』とやらを教えてもらったんじゃあないのか、とも思う。今更俺が教えてやれることもないだろう。そして何より、本当に情けない話だが、ここで更に俺が手を加えることで原作に影響を与える事が一番怖

い。
「強くなりたいから、じゃあ納得してくれない？」
「それはお前、悪いとは言わないが。ただ強くなりたいのなら何も俺じゃなくともいいだろう」
一応、この町にも武術館や剣道場がないわけじゃあない。なんなら自警団の修練場もある。どれだけ熱心に取り組んでるのかは分からないが、もし俺が転生してなければ原作のローはそこに通っていたかもしれない。
「誰とも知らない人に教えを乞うよりも、身近にいる強い人に頼む方がよっぽど効率的でしょう？」
「なるほどな。だが」
「随分とごねるわね。何か隠してる事でもあるの？」
さすがは原作きっての知能犯、鋭いな。じゃあ、ちょっとお兄さんズルするぞ～。
「そうだな、あるにはある。ところでロー子よ」
「何よ」
「それはお前が寝言でいうコラソンという名前と何か関係があるのか？」
「っ!!?」
目に見えて分かる程度には狼狽えるロー子。よかった、ここで反応してくれなかった

らちょっと恥ずかしかった。

「悪いが、何の事情も知らないまま殺しの技術を教える訳にはいかない。将来の大罪人をこの手で育てることになったら笑い話にもならない」

俺の言葉に俯き始めたロー子を見ると少々心苦しくなるが、これでも一応は筋の通った話だろう。誰だって犯罪に手を染めたくはないのだから。色々と複雑な気持ちになるし自嘲もしたくなるが、それはそれ。ひと先ずは置いておく。

「そうね、確かに虫のいい話だった」

俯きながら、ロー子はポツリと呟く。拳をグッと強く握りしめ、体は小刻みに震えている。

ちょっと言い過ぎたかなと思いつつも、しょうがないとも考える自分がいる。とはいえ、このまま居続けるとより空気が悪くなるだろう。そっと席を立とうとすると、ロー子に服を掴まれた。なんだと声を出す前に、俺は彼女の顔を見て絶句してしまった。

「いいわ、全部、全部話してあげるわ。私の過去を」

笑顔、と言えば聞こえはいいのだろう。しかし俺はどうにも、その笑顔が無理をしている様に見えてならなかった。

★

ローから聞いた話は、おおよそ俺が知るワンピースの知識と相違なかった。ただ話すたびに吐きそうな顔になる彼女を見ては、俺は自分が地雷を踏みぬいたことを実感してしまった。知っているからこそ、自分のしでかした事がどれだけ残酷であったのかを認識してしまった。

「……悪かったな、そんな話をさせて」

「謝らないで。あなたが焚きつけたんだから。それに、私にとってもちょうどよかった」

「そう、か」

何がどう丁度よかったのか、そんなのは俺でも分かる。彼女はこの頃から復讐心であふれていた。故にソレを再確認できたのはローにとっては僥倖に他ならないのだろう。

×

×

ようやく日常を謳歌し始めたローに、俺は「コラソンの死」を再認識させてしまった。それがどれだけ残酷なことかは計り知れない。半端な気持ちでこの話題を持ち込んだのは間違いだったのだ。しかし、だからこそ、俺も腹を括るべきなのだろう。

「お前の境遇は分かった。なら猶更分からねぇな」

原作介入、それで将来どうなるかは分からない。だが俺はこうして当事者になって、ローの傷口を掘り返したのだから筋は通すべきだ。

「話を聞いてた限りじゃあ、そのコラソンって奴はお前に平穏に生きてほしかったように思える。そういう願いが少なからずあったはずだ。ならその願いに殉じてやるのがソイツにとって最大の手向けになるって考え方は、お前の中にはないのか？」

原作を読んだ時から不思議だったことだ。トラファルガー・ローという人間はかけがえのない犠牲を払って平和な日常を生きることが出来たはずだ。それなのに、どうして自らそれを投げ捨てたのか。それを直接聞かなければならない。これはケジメなのだ。

「それは違う」

ローはハッキリと断じた。何を馬鹿なと、涙を湛えながら不敵に笑う。

「あの人は私は自由だと言ってくれた。なら、あの人が望もうが望むまいが私の人生は私が決める。それが復讐であろうと、誰にも文句は言わせないっ！」

彼女の声は震えていたし、実際泣いていた。無理をしているのは明白なのに、どうしてか彼女の表情は真っすぐだった。真っすぐこちらを見据えて、強く言葉を叩きつける。

きっと仇討ちはコラソンの望むところでないと分かっていても、それだけ好いていたコラソンを殺めたドフラミンゴが許せないのだろう。己の主張が詭弁だと分かってい

ても復讐を願わずにはいられないのだろう。
　ああ、知識で知っていることがこんなにも憎らしい。もし俺が自然にこの世界の住民なら、後腐れなく彼女に師事されてやるのに。まったく、本当に。
「――――分かった。俺の武術はほぼ我流だ。教えてやれることは少ない。実践が主になるが、いいな？」
「望むところよ」
　でも、覚悟は決まった。

★

「あれ、でも待てよ？　お前の話が本当なら、お前はその海賊のところでよほど戦い方とやらを叩きこまれたんじゃあないのか」
「ええ、でも『これ』の扱い方は別よ」
　そう言うと、ローは手のひらに球体の空間を作った。まだ命名はしてないのだろうが、これは原作で言う所の『ＲＯＯＭ』で間違いないだろう。
「悪魔の実か。確かにお前、こそこそと練習してたもんな」

「あら、知ってたの？　じゃあ話は早いわね。いかにも私はオペオペの実を食べた悪魔の実の能力者。ただ私は私の能力を十全に把握しきれてない」

え？　そうなの？　てっきり医学を修めてたから出来ることは感覚的に全部わかってるもんだとばっかり思ってたが。

「そうか、じゃあ使ってる内に出来ることは分かるようになるだろうさ。表出るぞ」

「え？　もうやるの？」

「悪魔の実の能力は実際に扱うことで初めて出来ることが分かる。それで戦うってんなら、特にな」

ソースは俺。ツバメと格闘術を組み合わせるのはめちゃくちゃ難しかったぜ。

「それじゃあ。まずはどれだけ戦えるのか見せてくれ」

と、かっこつけたのは良いが、ローは能力を使いこなせなくとも割と普通に強かったという事を最後に記載する。あと筋力と体力はちょっと足りてないとは感じた。

プロローグ４

目が覚めた時、私は温かい毛布に包まっていた。上体を起こすと、丁度こちらに背を向ける形で座っている男がいる。後ろ姿だけでも、その男が私よりも一回りも二回りも大きい偉丈夫だという事が分かる。男は囲炉裏の火加減を気にしているのか、頭を掻きながら何やら突いていた。

私は暫くそれを眺めていると、

「あと少しで飯が出来る」

と、男はこちらを見ることなく言った。

また暫くすると、男が盆を持ってきて私の前に置いた。その上には焼き魚とお味噌汁、お新香、そして白飯とおよそシンプルな料理があった。私がそれらを認めると、彼はそそくさとまた囲炉裏の方に戻り、恐らくは自分の分をよそい始める。

目の前のご馳走を食べるか否か。それはとても難しい問題だ。三日間何も腹に入れず、雪が降る中ずっと歩き続けた体は深刻な空腹を訴え、今にも箸をもってそれらを食さんとしている。しかし――

「毒は入ってない。それでも嫌なら食うな」

男はそう言って豪快に魚を食らった。それがあまりに食いっぷりがよくて、どうしようもない私の食欲を刺激してしまった。

「……もっと落ち着いて食えよ。ほら、水だ」

男が差し出してきた水を一気に飲み干す。そうしてまた食らう。頬に涙が伝った。

「おかわり、まだあるぞ。食うか？」

茶碗を突き出す。男は茶碗一杯にご飯を載せてくれた。おいしいのだ。たまらなく。

ここがどこだとか、彼が何者かとか、今はとにかく本当にどうでもよかった。

ただ、ここには温かさがある。それだけでお腹がいっぱいになる。すると今度は行き場を失った悲しみが私を襲った。

もし私が間違えなければ、コラさんは死ななかったのだろうか。もしもっと私がしっかりしていれば、彼と一緒にこうして温かいご飯を共に食べることが出来たのだろうか。

『もしも』の話に意味がなくとも、考えずにはいられなかった。

★

「で、そろそろ聞かせてもらってもいいかしら？　どうして助けてくれたのか」
意識を失ったのはオペオペの能力で肝臓に溜まった鉛を抜き取った後。洞窟の中での話だ。なら、状況的に彼が私をこの山小屋まで連れてきたのだろう。
男はお猪口に入ったお酒をあおった。そうしてこちらの顔を見つめながら彼は思案に耽っているのか、顎に手をやった。暫く待っていても男が思考をやめる気配がなく、それが気に入らなくて、
「……話しかけているのだから、返事をするのが礼儀でしょう」
と、自分でもびっくりするくらい不機嫌に返事を催促した。すると彼はお猪口にお酒を注ぎながら答える。
「野良犬に死体かどうかも分からない物をくれてやる必要もないだろうさ」
それは、なんともひねくれた答えだった。しかし、そのひねくれた言葉と態度の裏に確かな優しさが見えた気がした。そう、まるでコラさんが私をクズ山に投げ飛ばした時のように。でもそれを確認するのも何か違うような気がして、私はただ単に「そう」と返事をする。
「こちらからも聞かせてほしい。何故洞窟で倒れてたんだ」
「成り行きよ」
私が食い気味に答えても、彼がそれ以上追及することはなかった。自分でも苦しい言

い分だと思っただけに、意外だった。
「……帰る場所はあるのか」
帰る場所。生まれ故郷なら世界政府に焼かれた。ドン・キホーテファミリーにも戻ることは出来ない。大事な人は失ったばかりだ。返事は決まっていた。
「いいえ」
ただ、コラさんはもう自由だと言ってくれた。それで十分だ。
「そうか、なら暫くここを使うといい。嫌だったら別にいい、好きにしろ」
でも、どうしてだろう。今はこの男の世話になるべきだと、己の頭の中で囁いている。あるいはこの男があの何故かいつもドジを踏んでしまう彼と雰囲気が似ているからだろうか。
「い、いいの？」
「好きにするといいさ。食い物も当分は出してやる」
ただ単に寛容だからなのか。それとも何か別に狙いがあるのか。いっそ不気味なほどに話が進んでしまうことに危機感を覚える。でも、この目の前の偉丈夫を見極めるのは今すぐでなくてもいいような気がした。
「それじゃあ、お言葉に甘えて。暫く厄介になるわ」

★

町の人の話を聞く限り、彼が山籠もりの武術家であるという認識に間違いはないらしい。そして口数が少なく、不器用だがお人よし。年齢は意外と若く、まだ１８歳らしい。あと彼の作るご飯は質素だがおいしい。たびたび飽きてしまうが。

彼の特徴として、基本的にこちらに選択肢を与えてくれるという物がある。彼の口癖なのか、よく「好きにしろ」と言うのだ。自主性を重んじるのが彼のスタンスという事だろうか。

武術家としての腕は申し分なく、曰く「熊殺し」であるという。また悪魔の実の能力者とも。

いつかは海に出る身の上。そのために力をつけたい。だから彼を利用するという考えが頭をよぎった。住む場所をもらい、食事も与えてもらったその上に、更に追加で要求することに気が引けないといえば嘘になってしまう。しかし手段を選んでいては強くなれないと、癪だがあのドフラミンゴ達と過ごして実感した。

故に、忌まわしい過去を打ち明けることも吝かではなかった。

それに彼は信用するに値する人物である。それはこの一年間共に過ごして十分に分

かった。案の定、驚くこともなく、同情することもなく、彼はただ真っすぐ真剣に受け止めた上で師事することを許してくれた。

「動きが鈍いぞ。下手に技術を盛り込もうとするからチグハグになる。聞きかじっただけの技を扱うよりも、まずは基本を押さえてみろ」

早速立ち会ってみた結果、彼は想像以上に強いという事が分かった。あのドフラミンゴの幹部連中に勝るとも劣らないほどの強さを感じる。実際手も足も出ずコテンパンにされて、それでも食らいついてみたけれど結局一撃も浴びせることは出来なかった。しかも彼は能力を使用した気配がない。

「素晴らしいガッツだ。筋も良い。たぶんな」

「……これだけぼこぼこにされたら、嫌みにしか聞こえないわよ。まったく」

日が暮れ、疲労のあまり大の字になって倒れた。すると彼も私の隣に座って胡坐をかいた。ついでと言わんばかりに瓢箪を私の前に置いた。とぷんと音がする。スキャンしてみたら、どうやらほんの僅かに塩分を含んだ水が入っていることが分かった。配慮が行き届きすぎてて笑ってしまう。

「まぁ、あれだ。ローの能力は本来戦闘向きじゃないのかもしれないな」

「ええ、そうかもね」

オペオペだもの。本来は手術に使う、言うなれば人を助ける力だ。それを畑違いの戦

いの場で扱おうというのだから、難易度が高いのも致し方ない。
「でもどんな能力も使い方で凶悪になる。知ってるか？　世の中には肉球で地形を変える奴がいるんだぜ」
「何よそれ」
「例えばだ、お前はさっきまでずっと移動手段としてしか能力を行使してなかったが、逆に俺を移動させるって使い方もあるんじゃないか？　手前にとって都合のいい場所に敵を瞬間的に移動させることができたら、そりゃあ強いだろうさ」
不覚にも、なるほどと思ってしまった。彼の強さには鋭い観察眼も含まれているのかもしれない。やはり教えを乞うて正解だったと分かる。
「あとあれだな。あまり言いたくはないが、お前は女だ。ロー」
「力がないって言うんでしょう？」
それは、言われるまでもなく前々から感じてたことだし言われてきたことだ。もしも私が男だったら、こんな事考える必要もなかったのだろうか。
「ああ。それに体力もない。長年難病に苛まれてたお前には酷かもしれんが、まずはそこらへんを埋めるところから始めるべきだな」
「これでも筋トレとランニング、頑張っていたつもりだったけれど。もう少し増やした方がいいかしら」

「いや、その必要はない。効率を良くしよう。というかお前、ガッツがスゴイから今まで無理に無理を重ねてたんじゃあないのか？」
「そんな事ないわ。体調には細心の注意を払ってるもの」
「ああ、そういえば医者の卵だっけか？　なら能力の使い方も俺より思いつきそうなもんだが」
「理論だけなのよ。そうね、例えば生体電気を利用して――――」
こうして、彼による特訓の日々が始まった。数日後、ベポとペンギン、そしてシャチがこの特訓に混ざってくるのはまた別の話である。

プロローグ５

「私の勝ちね」

ローが我が家、もとい山小屋に住み着いてから三年。立派に実ってしまった彼女は色々な意味で大きくなっていた。だがそれ以上に逞しく成長していた。心技体、それぞれが高い水準に彼女は至っていると言えよう。最近だと良く分からんけど強いらしい海賊の船長に勝利していたし。

特訓で俺がローを圧倒していたのは最初の数か月のみ。それ以降、彼女は驚異的な速度で実力を伸ばし、気づけばツバメの能力を全力で使用しても、虎の子の短刀を使用しても勝ち目がなくなり始めていた。それでも意地でローの反則的な成長速度に食らいつき、今日まで師匠ポジションを守っていた。

しかし、それも終わりのようだ。何戦目になるかは流石に覚えていないが、彼女はついに俺をコテンパンに打ちのめしてくれた。

「ああ、そして俺の敗北だ」

刀の切っ先を喉元に向けられている。それに対し、俺は両手を上げて降参の意を示す。文句なしに負けた。

「ありがとう、貴方のおかげで私はここまで強くなれた」
「何を馬鹿なことを。お前は元から強かったよ」
ローの表情が綻ぶ。負けたっていうのに、なぜか俺の気分も悪くない。
「いいえ、それは違う。貴方がいてくれたから、今日、こうして貴方という目標を超えることが出来た」
女性になってしまったとはいえ、好きな人（キャラクター）に目標だったと告げられるのは良いもんだ。大したことは何にも教えてやれてないが、それでもだ。
「じゃあ、そろそろ船出か？」
「そうね。今日中にでも出航するつもり」
彼女は言っていた。俺に勝つまではこの島から出るつもりはない、と。だからその戒めも今日で最後である。
ちょっと寂しくも感じるが、これから彼女はドフラミンゴ打倒のために偉大なる航路（グランドライン）を目指すだろう。ならその事情を知る俺が、彼女の旅立ちを邪魔するわけにはいかない。
「ああ、そうかい。風邪引くなよ」
随分と疲れてしまったから、大の字になって倒れる。するとローは声を出して笑い始めた。そして思いついたように俺の隣に胡坐をかいて座った。

「なんだよ」
「いえ、なんでも。それよりも風邪ですって？　お生憎様、私は医者ですので気を遣わなくて結構よ」
「お前海を舐め過ぎだぜ？　気が付いたら遭難してるからよ」
「あなたと一緒にしないでよ。大体私の船は潜水艦ですし？　そんじょそこらの船とは違うわ」
「むしろ潜水艦の方が海流に呑まれそうで怖いな」
「大丈夫よ、ヴォルフさんが作ったポーラータング号は絶対に沈まない」
「はは、その自信はどこから来るのやら」
まぁでも原作でも新世界まで行けるんだから相当頑丈でしっかりした潜水艦なのだろう。とはいえ、潜水艦って四人で動かせるものなのだろうか。ベポが何故か一端の航海術を持ってるから、その点では問題ないのだろうがそれでもやはり不安だ。
「……三年か」
長いようで短かった。じいさんが亡くなってからというもの、海賊として海に出て名乗りを上げる勇気もなく、かといって海軍に入って彼らの掲げる正義に殉じるつもりもなく、とにかくただ惰性で一人生きていた。きっと、怖かったのだろう。狩猟して、皮を売って、採集して、丸太を割るというローテンションを延々と繰り返す日々。

それに比べ、この三年間は何と楽しかったことか。打てば打つほど強くなる餓鬼どもを相手にして、特訓が終われば飯を作ってやって、狩猟の仕方や薬草の見分け方も教えた。大体誰かが何かしらトラブルを起こすから、一日一日が退屈することのない素敵な日々であったことを覚えている。

それが終わってしまうことに、一抹の悲しさがある。また元の生活に戻ることが怖いとも言える。しかし、いつまでもうだうだ言うほど俺はお子様じゃあない。

「まぁ、元気でな」

別れの言葉は簡潔に、後腐れなく。俺は立ち上がってローから背を向けようとする。

「はぁ?」

すると俺はいつの間に地面にぶっ倒れていた。この奇妙な感覚は彼女の技、シャンブルズだ。苦言を呈そうとする俺に、彼女は馬乗りになって手首を押さえつける。あっと言う間に無力化された。いや、その気になれば振りほどけない訳でもないのだが。そうするとたぶん堂々巡りになる。

「え?」

「え、じゃないわよ。何勝手に話を締めようとしてるわけ?」

勝手も何も、もう行くんでしょ?

「お前さっき今日中に出発するって」

「ええそうよ」
「じゃあ早くいけよ」
「ええ、早く行きましょう」
「は？」
「え？」
なんか全く話がかみ合わないのですが。つまりどういうことだ？
「なんだ、出発できない理由でもあるのか？」
「だって船員が足りてないもの」
「誰が足りてないんだ」
原作的にはベポ、シャチ、ペンギンの三人がハートの海賊団の初期面子である。となるとこのうちの誰かが海に出たくないってことなのか？　いや、あれだけ海賊になることを楽しみしてたやつらが今更怖気づくなんてことはないと思うのだが。
「あなたよ」
「は？　俺のこと？」
「そう、貴方」
心底不思議そうな顔でこちらを見つめるロー。どちらかと言うと一番混乱してるのは俺の方だと思う。

「なんで俺……いやそもそも俺は海に出るつもりはない」
これ以上原作に干渉したらどうなるか俺にも予想がつかない。原作には登場してないローの過去だからこそ、完全なイレギュラーたる俺の存在が許されているというだけの話なのかもしれないのだ。だから俺は———
「五月蠅いわね。私が勝負に勝ったんだから、黙って私についてきなさい」
「それを言ったらお前、俺の方が何百とお前に勝ってる」
「残念ながら私は一度も敗北を認めたことは無いわ」
「お前それは———」
確かに、彼女の口から降参の言葉が出てきた事はなかった。しかしそれはただの強がりに他ならないわけで、決して胸を張れるようなことではない。
「いいこと？　何が貴方をそんなに臆病にさせるのかは知らないけれど、もう大丈夫。私は貴方より強くなった。貴方を守る事が出来る」
手首を更に強く押さえつけたまま、彼女は鼻先があたりそうになるくらい顔をこちらに近づける。
「違うわね。それだけじゃない。私は貴方と航海をしたい。だってもう貴方だけなのよ」
それは酷い殺し文句だ。そんな事言われたら誰だって頷いてしまう。でも、ダメだ。

「それでも、俺はいけない」
俺はこの世界における不穏因子だ。俺の行動が本来死ぬはずではなかった人を殺してしまうかもしれないし、その逆だってあり得る。ソレが巡り巡って原作の世界を壊してしまうかもしれない。それがたまらなく怖い。もしそれが誇大妄想だったとしても、いや、むしろ妄想であった方がいい。そうだったら、少しは気が楽になる。
「私は貴方の本心を聞きたかった。でもダメみたい。前々から思ってたけれど、海に出ることは極端に嫌ってたものね」
俺を拘束する力を弱め、心底残念そうにローは肩を竦めた。あきらめてくれるだろうか？　それならそれでいいのだ。俺にとっても、ローにとっても。
「ああ、俺の事は気にしなくていい」
彼女は馬乗りになったまま、ゆっくり俺の胸に手をおく。心なしか、その仕草には躊躇いと寂しさが垣間見えたような気がした。
「許さなくていいわ。ただの荒治療よ」
その次の瞬間、全身の力が抜けた。生体を構成する上で最も大事なモノを今、抜き捕られた。それは真っ赤に色づいた大きな柿のようだった。
「綺麗ね」
ローは俺から奪ったソレを眺めて独白する。まるで大切な宝物を扱うかのような丁

寧な手つきで、しかし矛盾するようだが彼女はさながら新しい玩具を与えられた子供のようにソレを弄ぶ。

「お、まえ。それ、は」

「ご名答。貴方の心臓よ」

ローはぺろりと俺の心臓を一舐めする。確かに今、ローの手にあるアレから滑りとした、身の毛もよだつような感触がした。その行為が否応なく、俺の心臓であることを教えてくれたのだ。

「ロー、お前それをどうするつもりだ」

「大事に持ってる。だから代わりにこれをあげる」

そういって彼女はぽいと、いともたやすく真紅の物体を俺に投げ渡した。しかしそれは俺のモノではない。俺のは彼女が持っている。だからコレは――

「何考えてんだっ！」

彼女はワイシャツを捲って己の左胸部を見せる。そこには何かでくり抜かれた穴があった。ちょうど、俺と同じように。

そして彼女はあろうことかその穴に、俺の心臓を埋め込んだ。

「これで貴方と私は一心同体。私が死ねば貴方も死ぬし、貴方が死ねば私も死ぬ。素敵でしょ？」

「だから何考えてんだって言ってんだよ!!」
俺の怒鳴り声にも彼女は微動だにしない。むしろ口元を三日月に歪ませ、狂気を孕んだ笑みを浮かべる。それは奇しくも、彼女が忌み嫌う『彼』と同じ表情だった。
「私はこれ以上大事な人を失いたくない。貴方が傍に居ないなんて、そんなの今にも気が狂ってしまいそう。だからこうするしかないじゃない」
「だからって」
「だって貴方は教えてくれないじゃない。どうして仲間になってくれないのかも、どうして人も海も何もかも避けようとするのかも。なのに私だけ励まされて、与えるだけ与えて、そんなの、ズルい」
理屈なんてない。子供のようなわがままに見えて、その実彼女の言葉は俺の心を的確に抉った。
結局、俺はトラファルガー・ローが好きだったのだ。それに尽きる。だからこそ、俺は本当はこんなにも密接に関わるべきではなかった。
だってそうだろう。現に俺という自我が確立してしまったことで、俺の身の回りの人はすぐに死んでしまったのだ。あの気のいい海賊たちも、お山のじいさんも。俺が人と関わると、その人は早死にしてしまう。なら、誰とも関わるべきではない。そう考えてしまうのは、自然ではないか。

それなのに好きなキャラが女体化したとはいえ、文字通り目の前に、偶然現れてしまったがために、俺は卑しくもこの物語に参加したいと思ってしまった。しかし彼女と過ごすにつれて、ローという人物を知った。本当は依存気質で、梅干しが苦手なサディズムの趣向を持つ小娘。ああ、彼女は俺の目の前で実在するのだ。

だから俺はまた思い出してしまったのだ。俺の近くにいた人間は皆死んでしまった事を。

でもそんな事、誰に言えるか。俺は前世の知識を持つ転生者（イレギュラー）で、だから俺の周りの人たちは皆死んでしまったかもしれないなどと。ましてやその前世でこの世界は漫画だったなどと。狂人と思われるに決まっている。

しかし、告白できなかったのは俺の勇気のなさが原因だ。ローは、彼女は俺に必死こいて過去を打ち明けたのにも関わらず、対する俺は俺の異質性を告げる事はなかった。できなかった。

嫌われたくなかった。過去を晒したことで、俺の前からローもベポもシャチもペンギンも、仲良くなったみんながいなくなることがこの上なくいやだったのだ。どうしようもない、俺のわがままだった。

でもそのわがままで、彼女を傷つけてしまったのなら、それはもう話が別だ。

「そうだな。手前にだけ話させといて、俺からは何もなしじゃああんまりだもんな」

少しだけ、勇気を出そう。たぶん、その時が来たのだ。

★

「要するに、貴方は前世の知識を持ち合わせていて、しかもこの世界は前世で創作された物語そのものだって事？　で、だから周りの人も死ぬかもしれないって？」

「……ああ」

神妙な面持ちの俺に対して、彼女は心底呆れたようにため息をついた。因みに彼女は未だに馬乗りになったままだ。ついで言うと心臓も返してもらってない。

「バカバカしい。どんな話が飛び出てくるのかと思えば、全くもってアホらしかった」

「一応これでも嫌われる覚悟で話したんだ。そこまで言われると、傷つく。というか、信じるのか？」

「ほんっとに筋金入りの馬鹿ね。もちろん信じる。それに言ったでしょう。私にとって貴方はもう大事な人の一人なの。いまさら何を言われたところで嫌いになれるわけないでしょうが」

こつんと、刀の鞘底をぶつけてくる。地味に痛い。

「でもね、貴方のせいで周りの皆が死ぬだなんて、それは思い込みも甚だしいわ。貴方

の周りの人たちはちょっと不幸だっただけ。そして貴方はその人たちよりほんのちょっと幸運だっただけ。これはそれだけの話。大丈夫、私たちは死なないわ」

「それは分からない。でも――」

「ああもう！　ちょっと今までのイメージが崩れるくらい軟弱になってんじゃないわよ！」

ごつんと、今度は強めに鞘底をぶつけてきた。いや、というよりも殴ってきた。

「いいから、行きましょう!!」

後に『死の外科医』の右腕と呼ばれる男はこう嘯いた。あの時の船長はマジかっこよかった、と。

シャボンディ諸島編１

苦節八年。ハートの海賊団が旗揚げをすると、ローは即座に仲間集めを始めた。無論そこには俺もいた。

あれから強引に『ポーラータンク号』に詰め込まれた俺は、結局ローの心臓を返すこともできず、また俺自身の心臓が返されることもなく、なし崩しでコック兼副船長としてローを支えることになる（一応ちゃんとしたコックが後から加入する）。ローのおかげでいろいろ吹っ切れたし、あれだけ誘ってくれたのだから俺から折れるしかない。というか、ローが死ねば俺も死ぬし、俺が死ねばローも死ぬのだからこうなるのは必至だったのだろう。

仲間集めがひと段落つけば今度は金や医療器具、食料、ログポース等の必要な物資、偉大なる航路（グランドライン）の情報などを積極的に集めた。因みにこの時のローは正に一船の船長と呼ぶに相応しいカリスマと慎重さを見せつけてくれた。しかしロー曰く、ここまで備えるのは海に臨む者として当たり前らしい。となると、ぶっつけ本番で偉大なる航路（グランドライン）に乗り出したルフィたちってやっぱりおかしいんやなって。

とはいえ、入念な準備を重ねに重ねた俺たちは、ついに偉大なる航路（グランドライン）に入る。

割と敵船に容赦のないローの悪名はすぐに広まり、即賞金首になった。とはいえ、彼女が悪党な海賊と世界政府に関わる海軍を良く思わないのは仕方がないわけで。そこに関して俺から特に話す事はない。ただ何故か、そのちょっぴり危険なローと一緒にいる俺も懸賞金をかけられた。海軍の基準は良く分からない。

俺たちの航路はそこそこ時間がかかった。数年かけて前半の海を攻略したといえばその長さが分かるだろう。行く先々で問題が起こったり、磁気の記録に時間がかかったのがその原因である。また道中に強敵と言える海賊や海軍が現れた訳だが、そこは流石未来の七武海、その全てを粉砕してようやくシャボンディ諸島に到着した。

「ようやくここまで来たわね。ホント、長かった」

「ああ、一人も欠けなくて良かった」

視界に広がるは無数のシャボン玉が浮かぶ巨大なマングローブ群。事前情報によると、あれは厳密には島ではなくマングローブ、正式名称ヤルキマンマングローブの集合体らしい。そのためいくら滞在しようがログに影響はない。まさに新世界に臨む海賊の最後の準備場所って訳だ。

「1～29と書かれてあるマングローブは無法地帯らしいわ。船を泊めるならそこね」

「あいよ。じゃあ俺ちょっと見てくるわ」

島が見えたら俺が偵察する。この流れがテンプレートとなっている。
「ええ、任せる」
「行ってらっしゃーい、副キャプテン！」
「おう、行ってくるよベポ」
かわいいウチのマスコットを撫でる。この八年で随分と大きくなったが、相変わらずかわいい。この純真無垢な感じが非常に愛くるしい。特に懸賞金が１００ベリーだって分かってしょぼくれた時が一番良かった。

★

トリトリの実、モデル『ハリオアマツバメ』。俺の食べた悪魔の実の正式名称はそうらしい。なんか動物に詳しいウチのクルーが教えてくれた。トリトリの実は世界でも有数の飛行能力をもつ悪魔の実である。しかしよくよく考えると、空を飛べるのって実はあまり珍しくもない気がする。使い方次第で空を飛ぶことが出来る悪魔の実なんていくらでもあるし、なんならこの世界体術で月歩とかあるし。割と悲しみが深いな。
とはいえ、空を飛ぶことは気持ちがいい。それにそこまで体力を使うことなく常に飛行可能なのは確かな強みであると思う。実際、こうして空から探索できるのはトリトリ

の実の特権だろう。

「ああ、あの場所がよさそうだな」

空から見る限り確かに1～29番は無法地帯のようだ。人相の悪い奴らが多いし、建物はだいたい荒廃している。しかも港に停泊しているのは海賊船ばかりだ。いかにも雰囲気が悪い。これが馴染みあるのだから、俺も立派な海賊という事なのだろう。

対して60～69と書かれてあるマングローブには海軍の駐屯所が多いように見える。これだけ海賊が跋扈してる島なのだから、さぞかし苦労している事だろう。ああ、でも確か奴隷文化が黙認された島なんだっけか。とすると、むしろ職務怠慢になるのかね。非常にどうでもいいことだ。

さて、ある程度目星をつけた。あとは船に戻るだけだ。

「おつかれツバメ。どうだった？」

「17番のマングローブが良さげだ。比較的人が少ないし、船を隠せる場所が多い。あと60から69のマングローブには近づかない方がいい。あそこは海軍の駐屯所ばかりだ」

「了解。聞いたわね！　17番グローブに向かうわ！」

「「アイアイキャプテン!!!」」

★

「ふーん、という事はこの島にゃあすでに何人も億越えのルーキーがいるって事か」
「へ、へぇ、そ、そうですが……」
「だから貴方達は私達の首を狙った、と」
「は、はいぃ。お、恐れながら……」
俺とローの前にひれ伏す十数の男たち。上陸して、荷下ろしを始めた俺らにいきなり奇襲を仕掛けてきた奴らだ。ぶっちゃけ驚くほど弱かった。良くこんなんで挑んできたと思う。度胸だけならそれこそ億越えだ。
「悪いな、ロー」
まさかこんな早く賞金稼ぎに囲まれるとは思わなかった。俺の失態だ。
「仕方ないわ。大方、闇討ちだけは得意だったのでしょう」
「で、どうする？　やるか？」
「その前に、『メス』」
そう言って、ローは勢いよくこの集団のリーダー格らしき男の心臓を抜き取った。相変わらずえげつない技である。あれ潰したら死ぬんだからマジでやばい。というか、いつになったら心臓を返してくれるのだろう。

「ひ、ひいぃぃ!!」
「私の質問に正確に答えなさい。嘘をついたらどうなるか分かるわね？」
「はいいいいいぃ!!」
「船を泊めるのに適した場所を教えなさい」
「喜んでぇぇぇ!!」
即落ち3コマである。まぁ分かるが。俺も同じクチだし。
それからというもの、男はそれはもう必死で船を誘導してくれた。やはりウチの船長は素晴らしくスマートだ。少なくとも某麦わらの船長よりは。
「で、これからどうするよ」
「まずコーティング職人を探すわ。それが終わったらショッピング。付き合ってくれるわね」
偉大なる航路（グランドライン）には前半と後半を隔てる大きな壁がある。通称赤い土（レッドライン）の大陸。ソレを越えるには2つのルートしかないのだが、海のならず者である海賊にはそのうちの片方、いわば裏ルートしか選択肢として用意されていない。
そのルートと言うのが海底１０，０００ｍに位置する魚人島を目指す海底航路である。語るまでもなく、通常の船ではまず航海不可能だ。しかし、その不可能を可能にする技術がこの不思議世界にはある。それがこの島のシャボン玉で船を包むというもの

だ。すっごい間抜けに聞こえるかもしれないが、その技術を持つ職人なしでは新世界にいけない訳だ。

で、最後のショッピングは彼女の趣味である。

「あいよ。じゃあ俺は俺で探してみよう」

「大丈夫？」

「問題なし。さすがに海軍のお膝元で暴れようとは思わないさ」

「……そう」

腑に落ちないのか、少し不満げにつぶやくロー子。自分自身単独行動が好きなくせに、全く。

「まぁ、何かあればお前がいる」

心臓を共有している仲だからな。俺に何かあれば、具体的には心拍数が上がればローにもすぐ伝わる。そんでもって長い間互いの心臓を持ち続けた弊害か、お互いの位置が何となく分かるようになっている。だから問題ないだろう。

「そういう言い方はズルい」

「でも効率的だろ？」

「はぁ、好きにしなさい」

と、いう感じで許可をもらったのでツバメになって空を飛ぶ。行く場所は決まってい

た。

シャボンディ諸島編２

この世界に生まれてから約三十年。さすがに原作知識というのも朧げになっている。しかしそれでも要所要所は憶えているわけでして。

「確か彼がいるのは内陸の方だったはずだ。とすると０から１９番のマングローブを中心に探せばいいか」

今、俺が探しているのは『シャッキーのぼったくりＢＡＲ』である。前述の通りすべては憶えてないが、おおむねこんな感じの名前だったはずだ。少なくともぼったくりとは確実に書いてあった。

目的の人物はシルバーズ・レイリーである。コーティング職人としての彼の力がいる。聞けば、職人の腕が悪いと海底航路中にシャボン玉が割れて船がぶっ壊れるという。無論、そうなれば船員は皆死ぬだろう。そして原作で確実に腕のいいコーティング職人として登場したのは彼のみだ。ローが早めに職人を見つける事が出来たのなら、俺は彼女の決定に従う。しかしもしそうでなければ、それとなく彼を紹介するつもりだ。

俺の記憶が正しければ、近いうちにこの島でとんでもない事件が起きる。なら早期の内に逃げる手段を一つでも多く確保しておくのは決して悪い事ではないだろう。

とはいえ、シャボンディ諸島はかなり広い。１から１９番まで絞ったとはいえ、たった一つの店を探すのだから時間は相当掛かる事が予想される。だが幸い俺はツバメ人間。長時間空を飛ぶことは得意だ。その気になれば一日中飛行することだってできる。

しかしここでふと思いつく。

「人に聞けばよくね？」

思いたったが吉日。ツバメから人間に戻り、さっさと着地する。そんでもって近くを歩く人に声をかけた。

「すんません。自分ぼったくりＢＡＲって店探してるんですけど、知りません？」

良く人を見ないで話しかけたのは間違いだった。俺が話しかけた人物は赤髪でガラの悪い、いかにも海賊やってそうな超悪人面の男だった。しかもそいつの隣にいるのも仮面被った変な野郎だし。

「あん？　てめぇは確か……」

「キッド。こいつ、トラファルガー・ローの『鳴無』だ」

「あ、どうも。俺を知ってるんですねぇ」

冷や汗が出る。この二人、良く見るとただの変人じゃあなかった。最近見た手配書や新聞で、確かに見たことがある。ああ、そうだとも。こいつら――――

「ユースタス・キッドとキラーか」

「知ってるんだったら話が早い、何の用だ」
要件聞きながらナイフを弄るのやめてもらえませんかね？　人相も合わさりクッソ怖いんだけど。あれだ、ヤンキーを見て本能的に怖いって思うやつ。
「別に、本当にただ道を聞いただけなんでホント。あ、知らないんだったらこれで」
そうとだけ告げて回れ右する。ローとさっき約束したばかりじゃないか。危ないことはしないって。
もしここで少しでも話がこじれてみろ、絶対戦闘になる。俺から手を出すことはまず間違いなく絶対にあり得ないが、キッドは確実にすぐ手が出る奴だ。キラーだって殺戮武人って異名からしてやばそうだし。こういう時はさっさと離れるに限る。
「あぁ。なんだ、億越えだから期待したがただの腰抜けか。こりゃあ船長もたかがしれ――――」
その瞬間、ユースタス・キッドの体は後方に吹き飛ばされた。隣にいたキラーどころか、キッド本人も何が起こったのか理解できなかっただろう。何故なら、それだけの速度で、人間の知覚を許さない速度で蹴られたのだから。
「キッド!!　貴様ぁ！」
「ああ、悪いな。つい足が出ちまった」
それは、とても許されることではなかった。自分はまだいい。腰抜けというのは実際

間違ってないし。自分自身でも大いに認めるところだ。だから俺の悪口は笑って許してやる。

しかし、船長の、ローの侮辱だけは許されない。

「テメェ!!　いい度胸してんなぁオイ!!」

自身と衝突した建物の瓦礫を吹き飛ばし、額から血を流しならゆっくり接近してくるユースタス。こちらも短刀を抜き、臨戦態勢をとる。仮面の男の方もいつの間にか己の得物を取り出していた。

「キラー、お前は手を出すな。こいつは俺がやる」

「しかしキッド」

「分かってる。こんな雑魚すぐに息の根を止めてやる」

ユースタス・キッドを中心として、刀や銃、鉄骨など金属類が集まっていく。そうだ、こいつも悪魔の実の能力者だったな。

しかし、そんなことは大した問題ではない。問題なのはこいつがローを貶した事実だ。それだけで、俺がこの目の前の不届きモノと殺し合う理由に足る。

「覚悟は出来てるんだよな?」

「それはコッチのセリフだァ!!」

売り言葉に買い言葉。ツバメに変態し、初速で最高速度に達する。対してユースタス

は鉄クズの巨腕をもってこれを迎え撃たんとしていた。方や音速を超えた一閃、方や万物を破壊し尽くす鉄槌。
お互いが信頼する渾身の必殺技。それを真正面から受け止める者がいた。
「暴れたきゃあ、新世界へ!!!」

★

「すまねぇ、ちょっと冷静じゃなかった。あんた大丈夫か？」
「問題ない」
さすがに全身全霊の一撃を、しかも同時に受け止めることは同じ億越えルーキーでも難しかったらしい。間に割って入ったX・ドレークは両腕をかなり痛めてしまい、ソレを俺が応急処置しているといった次第である。
「早くこの街の医者かお前んとこの船医に診せた方がいい。そこまで深刻じゃないと思うが、一応な。あと患部はしっかり冷やしてな」
「ああ。悪いな」
そう告げてクールに去っていくドレークさん。どっちかと言うと悪いのは俺とユースタスのアホである。しかもそのユースタスは心底不機嫌そうな顔つきで帰っていっ

たし。少しくらい非礼を詫びるって気持ちがないのかね。次会ったら髪型をアサガオにしてやる。

「で、結局店は分からず仕舞いか」

目的は果たせず、空は夕日で赤く染まっている。船に集合する時間は一応決まっており、その時間までにはまだ余裕がある。しかし。

「色々疲れたからもう帰ろう」

肉体面よりも精神面で。怒ることってかなりエネルギーを使うんだなって思った。あんまり激情に駆られたことないから知らなかった。

ツバメになって帰るのもなんか面倒で、頭を冷やすことを兼ねてゆっくり歩いて帰ることにした。すると今度は空を飛ばない弊害が生じる訳だ。

「お前が懸賞金1億の『鳴無』のツバメだなぁ？」

「はぁ」

例えば賞金稼ぎとか。瞬殺するのは別に難しくないのだが、少し歩くとまた別の賞金稼ぎの集団が現れる。それが何度も繰り返されるとさすがに違和感を覚えるし面倒くさくなる。次の集団を仕留めた後、そのうちの一人から事情聴取するとそいつは、

「億越えルーキーの中で一番最低額の一億ベリーで、しかも一人だったから狙い時だと思ったんだ」

と宣った。なるほど、何も考えてない訳ではないんだなと思った。あまり強くないから意味はないんだが、それはそれ。足りない実力を知略で補っているのは素直に好感が持てる。一応何度も戦うことによる疲労も考慮していたらしい。いやはや全くもって、賞金稼ぎって悪知恵の集まりなのだろうか。

「次からは誰か連れてこ。もしくはずっと空飛んでよ」

シャボンディ諸島の過ごし方を学習した瞬間である。

シャボンディ諸島編3

時刻は午後の九時、ポーラータング号にて。皆が皆思い思いに、騒がしく夕食をとっていた時の話である。

「という事は、職人はもう見つけたのか？」

「ええ。相当な腕利きだそうよ」

「そうか、ならよかった」

俺がユースタスといざこざを起こしている間に、ローはきっちりコーティング職人を見つけたらしい。彼女が信用した人物なら信用できる。俺も異論はない。となると今日の一連の騒動は骨折り損のくたびれ儲けってことになる訳だが、あれは半ば自業自得なところもあるから何とも言えない。

「ところでツバメ。貴方、謝る事があるんじゃない？」

ローの一声で、船内は一瞬にして張り詰めた空気になる。気づくと船内のクルーたちは背筋を規則正しく伸ばして正座していた。因みにペポは口を開けて大の字で寝ている。かわいい。

心当たりはある。もちろん、ユースタスとの喧嘩だ。間違いなくあの時は心拍数が上

がっていたから、それでバレたのだろう。
「あーなんだ。そんな大したことじゃない。ちょっとユースタスの阿呆と喧嘩しただけだ」
実際、あれほどバカバカしい喧嘩はないだろう。俺が舐められたのが発端な訳だし。しかしそれでウチの船長が侮られるのだから、これからは俺自身の立ち振る舞いも考えた方がいいのだろう。仮にも一船の副船長だってのに、どうも頭が日和っていけない。
しかし今思えばあの野郎、ただ煽って怒った俺とやり合いたかっただけなんじゃあないかなって。だからドレークの仲裁が面白くなく、不貞腐れたように帰ったのではないか。まぁ何にせよ、はた迷惑な奴である。
「は？」
と、一人で納得していると、ローの表情から色が消えていた。
「え？　ちょっと待って。一応聞くけれど、どちらが先に手を出したの？」
「俺だ」
「大丈夫って、貴方自分で言ったわよね？」
今度は目から感情が消えていた。幽鬼的な瞳でこちらを見据える様は異名通りの死の外科医。正直こわい。こんだけ怒らせたの久々かも。
「……キャプテンめちゃくちゃ怒ってるぞ」

「しっ！　静かにしろって！　こっちに飛び火したらたまんないぞ！」
「早く副キャプテンおさめてくれ～」
小声で話してるつもりなのだろうが全部聞こえてるっていう。
「ま、まぁ落ち着いてくれよ。御覧の通り怪我もしてないし？」
「そうね。でも脳の治療はした方がいいみたい」
何を真顔でおっそろしいことを。
「いいこと？　分かってないようだからもう一度言うけれど、ここは海軍のご立派なお膝下よ。何か揉め事を起こせば大将が出張っても何ら不思議ではないの。それで一味が壊滅したら笑い話にもならない」
もっともな話である。耳が痛い。まったくもって恥じ入るばかりだ。
「それでも言い分があるのなら言ってごらんなさい？　長い付き合いだもの、何か理由があるんでしょう？」
どんなに怒っててても、公平な心をもって話を聞いてくれる。流石としか言いようがない。器が違う。あと自分が古参組であることに感謝だ。
「まぁあれだ。奴さんが俺を腰抜けと煽ったんで、ちょっと頭にきたから蹴り飛ばした」
「ダウト。貴方は自分が侮られてもなんとも思わない。むしろそれを好都合と考える

理性的な人よ」
「そりゃあ買いかぶりってなもんだ。俺も怒るときは怒る」
「そう。じゃあやっぱり脳みそ弄らないと」
ニッコリとぶっ壊れた笑顔で、ロー子は彼女の愛刀にして妖刀である大太刀、『鬼哭』を抜く。そんでもって俺はいつの間にか鎖で巻かれており、『ＲＯＯＭ』の中に入っていた。ご丁寧に患者服まで着せられている。オペる気まんまんである。
「お手柔らかに頼むよ」
こうなると、俺にはもう乾いた笑みを浮かべる事しかできない。せめて痛くない事を願うばかりだ。

★

「あーエライ目に遭った」
オペの内容を具体的に語るとするとグロテスクに過ぎるため省略するが、とにかくひどい目にあった。でも脳みそのブツ切りってちょっとサイコだよな。しかもそれを見せながら部位の説明をするんだぜ、あいつ。やべぇよ。
「副キャプテン大丈夫かー？」

「大丈夫だ、ベポは優しいな」
「うんそっかー。ならよかったー」
そんでもって船長より罰として『朝まで甲板で見張りの刑』を言い渡されている。だからこうしてぼーっと海とシャボンディ諸島を交互に監視している。超眠い。そしてベポはそれに付き合ってくれている。めっちゃ優しい。
「でもどうして副キャプテン、こんな罰を受けてるんだ～？」
「ちょっとローを怒らせちゃったからだよ」
「そっか～なら仕方ないなー」
「ところでベポ、眠くないのか？」
「さっきたくさん寝たからなー」
そういえばそうだった。こいつ、俺が人間解体ショーをされてる最中もずっと爆睡してた。本能的な部分で起きる事が危険だと悟ったのかね。さすがミンク族。
「となり失礼するわ」
背中越しにローの声が聞こえた。髪がわずかに湿り気を帯びており、風呂上がりであることが分かる。また彼女の手には三個のおにぎりがあり、そのうちの二つをひょいと手渡してきた。余談だが、おにぎりは彼女の大好物である。
「サンキュ」

「あ、キャプテン」
「こんばんわ、いい夜ね」
彼女は俺の隣に座ってから、おにぎりをほおばった。見た感じ具は鮭らしい。
「夜食は太るらしいぞ」
俺の言葉に彼女はジト目になって睨んでくる。ごめんって。
「私のベポを使って暇つぶしとは考えたわね」
「人聞きが悪い。ベポは優しいから付き合ってくれただけだぞ」
「さっき副キャプテンからかき氷もらった」
「あ、ばかっ！」
「へぇ？」
目元をぴくぴくさせながら口角を吊り上げんでください。美人が怒ると怖いんだからさ。
「……お、俺ちょっとトイレいってくる」
動物の本能で危機を感じ取ったのか、ベポは勢いよくおにぎりを食して急いで厠に向かっていった。逃げるの早っ。さすがクマ、でかい図体のくせして機敏である。というか爆弾落として逃げるな。
「さて、それで結局なんだったの？」

素面に戻ったローはそのように尋ねてきた。視線はもう暗く何も見えない海の地平線に向けられている。

「なんの話だ」

俺もおにぎりを食べながら聞き返す。具は梅干しだった。因みに彼女は日本食が好きな癖して梅干しが大の苦手である。だからこれはちょっとした嫌がらせのつもりなのだろうが、俺は梅干し大好きなので全く意味がないという話をしておこう。

「ユースタス屋さんとの話よ」

「だからあれは向こうが煽ってきたから蹴り飛ばしただけの話だって———」

「私が何の意味もなく貴方の脳を弄ったと思う？」

「どういう意味だ？」

「貴方が嘘をついてることはお見通しって事よ」

マジか、オペオペの能力ってそんな事もできるのか。何年も彼女と一緒にいるが、初めて知った。

「まぁ丁度ベポもいなくなったからな。話してもいいが、笑うなよ」

「もちろん」

「奴さんがお前も侮辱したからだよ。それでつい手が出ちまった。いやこの場合足か」

「ふーん、なるほど」
不意にローは顔を背けた。しばらくふんふん呟いた後、彼女はこちらに顔を向ける。その顔面は微妙にニヤケていた。
「笑うなって」
「ふふ、ごめんなさい。でもあれね、この船のクルーだったら皆貴方と同じことしそう」
「あーそれは否定できない」
皆ローの事好きだからな。心酔と言っても過言ではない。それだけ彼女に人望とカリスマがあるって事なのだが。
「とはいえ、それで海軍が動いたら笑えないけどね」
「分かってる。深く反省してる」
「そ、じゃあこれで話はおしまい。部屋に戻っていいわよ」
「割り当てられた仕事はきっちりこなしたい主義だ。遠慮しとく」
俺がそう返すとローは「知ってる」と呟いて頬を綻ばせる。そして彼女は少しだけこちらの方に詰め寄った。また能力の無駄遣いをしたのか、いつの間にか彼女の手にはとっくりとお猪口があった。ちょっと悪戯っぽい顔しやがって、かわいいじゃねぇか。
「マセやがって。しょうがない、付き合うよ」

「知ってた？　これでも私もう２４よ」
「そうだったな。時間は経過するのが早くていけない。気づけば俺も三十路のおっさんだ」
「元が老け顔だから気にしてないけどね」
「ひっでぇ」
お猪口を一つもらい、お酒を注いでもらう。こうして改めて二人で飲み交わすと、なんか感慨深くなる。初めて出会った頃のローは「何がおいしいの、それ」って言ってたくらいだぜ。それが十年近く前。そりゃあ大人にもなる訳だ。
「そういえばお前、酒好きなのか？」
「うーん、好みで言えば普通。お米と水で作られたお酒が一番好きだけど、自分から進んで飲もうとは思わないわね」
「へーじゃあ今日はどういう風の吹き回しだ？」
「雰囲気に酔う事は好きなの、私」
「あーなるほどな。ちょっと分かるわそれ」
ぶっちゃけ俺もお酒が好きなのって酔えるからとか、料理がうまく感じるからとかそんなふわっふわした理由だ。
「じゃあ、雰囲気に流されてさっそく告白するわ」

「おう、やったれ」
「別に頭を弄ったところで嘘なんて見抜けないわ。オペオペの実ってそんな便利じゃないの」
「おうこの小娘やってくれたな」

この後ベポも参戦してカオスなことになるのだが、それを語ると締まりが悪くなるので割愛する。ハートの海賊団、その一幕であった。

シャボンディ諸島編４

「ツバメ、１番ＧＲ（グローブ）の人間屋（ヒューマンショップ）に行くわよ」

キッド海賊団のキラーと破戒僧海賊団のウルージによる小競り合いを眺めながら、唐突にそんなことを宣うロー子。そういえばここらへんで麦わらの一味とローは初めて邂逅するんだっけか？　ほんと原作知識が朧気だ。

「別に構わんがなんでまた」

「あの店の代表取締役、ジョーカーらしいわ」

「あぁ、なるほどな」

ジョーカーとはつまるところ王下七武海の一人、ドンキホーテ・ドフラミンゴの裏の名前だ。ドフラミンゴは武器、兵器等のすべての軍事産業におけるブローカーであり、裏取引と言えば大体このジョーカーが関わっている。更には悪魔の実を人工的に創造する術も抑えているらしく、四皇のカイドウと密接な関係にあるという。

とはいえ、ここまで情報を集めるのにも大変苦労を要した。それに関しては流石のフラミンゴ野郎という感じである。まったく尻尾を掴ませる気がない。一応原作知識として僅かに憶えてはいるが、それだって調べてからようやく思い出せたくらいだ。参考

程度、気休めにしかならない。
「あら、終わっちゃった」
ウルージとキラーの争いは、ドレークが乱入することで決着がついていた。あの人いつも仲裁してんな。話が終わったのかこちらに近づいてくるドレークに対し、我が船長は、
「いいところだったのに。ドレーク屋さん、あなた何人殺した？」
とまるで挑発するかのように問いかけた。ドレークはローを一瞥した後、すぐに俺たちの前を立ち去ろうとした。その際、俺と目が合ったので俺は軽く首を横に振った。気にせんでいいよと、そんなニュアンスをこめて。彼も頷くことで返事をし、そのまま姿を消していった。
「ふーん、彼紳士なんだ」
「まぁ恐らくだが、根本的に悪い人ではないと思う」
市民に被害が及ぶため、この島での戦闘を食い止めてるように見える。元海軍将校らしいが、どんな経歴なのやら。顔面がいかにも幸薄そうだから、多分そういう事なんじゃあないかなとは思うのだが。
「さて、じゃあ私たちも行きましょう」
ローの言葉に、クルーたちはいつものように返事する。

「「アイアイキャプテン！」」

本当に今更だが『死の外科医』の異名を持つ船長が率いる海賊団の掛け声にしては、なんというかすごく可愛らしいなぁと、何となく思った。

★

1番GR（グローブ）の人間屋（ヒューマンショップ）にて。

さてこの人間屋という店だが、読んで字のごとく『人間』を商品として取り扱っている。またオークション形式であり、競り落とされた商品は落札者の奴隷となる。

本来人身売買は違法である。しかし海軍の監視下である筈のシャボンディ諸島で、その存在が黙認されている。十中八九ドフラミンゴの手によるものだろう。でなければこんな非道がまかり通る訳がない。

「今日は予算がたっぷりあるから沢山競ることが出来るぞぉ」

「おやおや、今日はどのような商品をお求めですかな」

「目の保養に若い女性を幾人か、ですな」

「貴殿も好きですねぇ」

非常に胸糞悪い会話が隣の席から聞こえてくる。端的に言って、蹴り飛ばしたい。

「ダメよ」
「分かってる」
ロー子の言葉に素直に頷いておく。同じことで怒られたくないからな。
広い会場にはびっしりと人が敷き詰められている。そして、そのほとんどがこの世界における富裕層である。大方世界政府加盟国の重役や貴族なのだろうが、こんな奴らがいつまでも上にいるからその国の民が苦労する。少なくともこの世界で奴隷を是とする奴らに俺は国政を任せたくない。それだけ、この世界の奴隷は人としての扱いを受けていないのだ。
「でも気持ちは分かるわ。だって酷い臭いだもの。一度死体の山を這いずり回ったことがあるけれど、それよりもずっと酷い」
そう言いながら、ローは薄く笑う。彼女の心中は察し兼ねるが、きっと不愉快であることに相違はない。
「キャプテン大丈夫か？　臭うのか？」
ローが不穏な事を言ったからか、ベポが心配そうに彼女の顔を覗き込んだ。すると彼女は穏やかに微笑んで、ベポの頭を撫でる。
「大丈夫よ」
「キャプテンとツバメさん、後ろにキッド海賊団がいる」

ペンギンが小声で伝えてくる。後ろを振り向くと、確かにユースタスの阿呆がいた。俺と目が合うと意味もなくすっげぇ不敵な笑みを浮かべてくる。畜生、いつか絶対泣かしてやる。

「ああ、道理で野犬の臭いも混じってると思った」

振り返りざまに、ローはユースタスらに中指を立てた。なんか今日すっごい挑戦的ですね。一応昨日俺に説教したのは彼女の方なのだが。しかも心なしか殺気立ってる気がする。

「なんだ、怒ってるのか？」

「いいえ。ただ私の所有物にケチつけてくれたらしいから、同じ事をしてあげただけ」

なるほど怒ってらっしゃるのね。

『え～それでは皆さん！　長らくお待たせいたしました！』

スピーカーを通して、舞台に立っている道化の男の声が会場に響く。男はこれからオークションが始まる旨を伝え、司会進行役の男にマイクを譲った。ディスコと紹介されたその司会の男は登場するなり、スポットライトが集中されあたかもスターのように振舞う。しかし実際、この人身売買を盛り上げるといった意味では確かにスターなのだろう。まったくもって胸糞悪い話だが。

『それでは早速オークションを始めていきましょう！　エントリーナンバー1、

西の海（ウェストブルー）はトロワ出身――――』

こうして不愉快になること必至のオークションが始まった。

★

「気分悪くなるっすね」

「まぁな。無理しなくていいぞ。外で待っててもらっても構わない」

「まっさかぁ、そんなガキみたいなことしませんよ」

下らない興行を見ながら、シャチとそんなやり取りをする。しかしここにいる奴らが金持ちすぎるのか、それともあのディスコとかいう司会が上手なのか、値段がめちゃくちゃ吊り上がっていく。果たして人生に相場があるのかどうかはさておき、リストによると人間の相場は５０万ベリーである。それが倍の１００万にまで値上がりしてもまだ競りが続く時があった。こいつらの持ってる金、絶対黒いだろ。

「ん？　外が騒がしいな」

ペンギンがそのように言うから背後を見やると、複数人の男女が入場してきた。ああ、あいつらは――――

「ありゃあ麦わらの一味っすね。エニエスロビーで世界政府に宣戦布告したってい

う、イカれた奴らですよ」

「ああ知ってる。だがどうやら船長はいないみたいだな」

麦わらの一味。『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』における主人公、ルフィが率いる海賊団の名だ。ルフィの懸賞金はルーキーとは思えぬ破格の三億ベリー。また一味全員がそこそこの懸賞首だ。それは彼らの起こしてきた事件がどれだけ重大であるかを物語っている。しかも一味を結成してからまだ一年も経過してないというおまけ付き。この世界に住む一人の海賊として、凄まじいの一言である。

「そう、残念。麦わら屋さんは一度見ておきたかったのに」

割と本当に残念がるロー子。まぁでもたぶんそのうち来るだろう。そういう筋書きだったはずだ。

それからも醜悪極まるオークションは続く。途中ででっぷりと太った天竜人がオークション会場に遅れて参加したりもしたが、それで何か特別な事が生じる訳ではなかった。

オークション終盤、巨人族の男が数千万ベリーで売られた後。司会進行の男が最後の商品を提示すると語り、ライトが舞台正面に集中される。シルエットだけ映されたのは上半身は人間、下半身は魚類の生き物。つまるところ、人魚であった。

「おおおおおお!!!」

「やったぞ！　超目玉だ!!」
「素晴らしい!!」
人魚の登場に会場は大いに盛り上がった。もう何も言うまい。
『それでは最後の大目玉、とくとご覧あれ!!　人魚のケイミーです!!』
「へぇ人魚なんて初めて見た」
会場が湧きたつ中、我らが船長も少し興味深そうに見ていた。
ローの態度から分かる通り、人魚はこの世界でも大変珍しい生き物である。またこの海で最も速く泳げる生き物として有名だ。そのため捕まえることが非常に困難であり、相場も７０００万ベリーと桁違いだ。だからこうして人間屋（ヒューマンショップ）で商品として出されることも少ないのだろう。それにしたって下衆な歓声だが。
ひとしきり興奮が収まった後、司会の男がマイクを持つ。
『久しぶりの人魚の登場となって、皆さん興味津々とお見受けしました！　さぁ、幾らから参りましょうか！　まずは――――』
「五億ぅぅぅ!!　五億ベリーで買うぇ!!」
司会の男の言葉を遮るようにして、例の天竜人が入札額を提示した。まぁ前述した相場の金額で分かる通り、破格どころかオーバーキルである。俺とローの首を合わせてもまだおつりが出てくるぐらいだ。

「はは、この世界の縮図を見せられてる気分ね」
ローが心底つまらなそうにつぶやく。まったくもって同感である。
さて、ここで天竜人の説明をしようと思う。
簡単に述べると天竜人とはこの世界における国連のような組織、『世界政府』を創設した２０人の王の末裔である。しかしこの世界政府という組織、現時点で８００年続いており凄まじく長い歴史を誇っている。したがってその偉大な末裔たる彼らはこの世界で相当な権力を持ち、ぶっちゃけた話何をしてもいいのだ。
何の罪もない一般市民を射殺しようが、何の前触れもなく拷問にしようが、それこそただその場にいただけの誰かを奴隷にしようが。本当に何をしても許される存在。それが天竜人であり、『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』という世界で最も醜悪と呼んでいい癌である。
「あれだけ喧しかったのに、この静まり様よ」
先ほどまでの歓声が嘘のように静まり返る。それは目の前でお気に入りのおもちゃを壊された子供に同じである。
天竜人が提示した入札額は確かに度を越した金額だった。しかしそれ以上に、天竜人が所望したという事実の方が大事であった。もし仮にこの場で５億以上の金額を用意できる人物がいたとして、その手に持つ札をあげる者はそうそういないだろう。

「で、これからどうするんだ？」
「とりあえず後であのディスコとかいう男を捕まえるわ。もちろん、この茶番が終わった後にね」
「分かった」
あの人魚が最後の商品という事で、しかもそれが落札されたというのならこの興行も遠からず終了する事だろう。ならこの場に残る意味もない。俺達が席を立とうとしたときのことである。背後の、ちょうど入り口付近から爆音が炸裂した。
「あっ!!　ケイミーだ!!!!　探したぞ～～～！　良かったーーー!!!」
爆発音の中心にいたのは、麦わら帽子を被った青年。彼は今回の目玉商品である人魚を見るなり舞台正面へ駆けて行く。それを引き留めるように一人の男がとびかかったが、それでも止まる気配はない。
「あれは、ひょっとして」
「ああ、麦わらのルフィだな。よかったな、会えて」
「あまり驚かないのね。もしかして知ってたの？」
「まぁな」
俺の返事にローは「そう」とだけ言い、麦わらに視線を戻した。麦わらはまるで暴走列車のごとく階段を駆け下りていく。とびかかった男は何やら彼を説得しているよう

で、仲が悪いようには見えなかった。
　すると今度はとびかかった男から四本の腕が生えた。否、生えたのではなく元々あったものを服の中に隠していたのだろう。男は六本の腕で麦わらを引き留めようとした。しかし、この島とその奇形はあまりにも相性が悪い。
「きゃあ～～～!!」
「魚人よ!!　気持ち悪い!!!」
「なんだって魚人だと!?」
「なんで陸にいるんだよ!!」
　魚人、魚の特性を備えた人間の事である。肌の色も腕力も何もかも人間とかけ離れているが、生物学上では人類である。しかし魚人は元となる魚の特性を持っており、例えばタコの魚人であれば腕が六本という事もあるだろう。
　そしてこのシャボンディ諸島ではその奇形を恐れて、魚人を魚類と蔑視する。要するに魚人を差別している訳だ。
「おい、あの天竜人」
　遅れてやってきたデブの天竜人が銃をその魚人の男に向けていた。そして、その引き金を引く。
　当たり所が悪かったのだろう。魚人の男はその一発で倒れた。口からは血を吐き出

し、相当な重症であることがうかがえる。
「助かるか？　あれ」
「すぐに適切な処置をすれば」
「そうか」
ローの言葉に安心する。本当に。
銃声でようやく我に返ったのか、麦わらは後ろを振り向いた。己を引き留めようとした魚人が倒れている。その事実を認めると、その目には怒気が混じっていた。やはり麦わらとあの魚人は仲が良かったらしい。
「何をするつもりかしら彼」
ローも彼の尋常ならざる怒りを感じたらしい。冷や汗をかきながら麦わらを注視している。あるいは、これから起こる事を察したのかもしれない。
さて、ここで話を戻させてほしい。天竜人についてだ。
なぜこの無法者も多いシャボンディ諸島で、天竜人は我が物顔で道を歩くことが出来るのか。例えばユースタス・キッド。彼はどれだけ相手が偉かろうと、気に入らなければそれだけで即刻始末するだろう。それが３億１５００万ベリーと言う懸賞金につながっている。
結論を言おう。天竜人に危害を加えれば、待っているのは海軍大将が率いる軍艦１０

隻の出動である。やろうと思えば国すらも破壊し尽くすことが出来る凄まじい戦力だ。だから誰も天竜人に手は出せない。

本来であれば。

「お前もムカつくんだぇ!!!」

天竜人が麦わらに向けて銃を乱射する。しかし麦わらはそれらを全く意に介さず、拳を握りしめ天竜人に詰め寄った。

本来であれば誰も手を出せない天竜人。だがもし、すでに世界政府に宣戦布告し、かつ海軍大将にさえ臆さない、そんな向こう見ずな海賊がいたらどうだろう。

シャボンディ諸島編５

麦わらが天竜人に手を出したことで、人間屋（ヒューマンショップ）は混乱を極めた。前代未聞の大事件の幕開けである。海軍大将がこの島に来ることは確定し、それ故に一般市民の皆様は巻き添えを食らわぬよう避難しなければならない。たった一人の友人のために大勢の人間を不幸にさせるところは、流石海賊であると言わざるを得ない。

閑話休題。

その後も店の奥から元海賊王のクルー『冥王』シルバーズレイリー。元ロジャー海賊団副船長が出てきたり、ユースタスの挑発にウチの船長と麦わらが乗って海軍を蹴散らしたり、混乱に乗じて天竜人の奴隷から新たに一人我らの仲間が出来たりと色々あったが、何とかオークション会場から抜け出すことに成功する。また追手として現れた七武海世界政府に略奪行為を容認された七人の海賊の一人、バーソロミュー・くまに似たサイボーグを一体、キッド海賊団とハートの海賊団の連携により撃破する。

「おバカさんだって聞いたけど、想像以上だったわね」

ある程度余裕ができたからか、ローは思い出したように言う。

「それで俺らも巻き込まれるんだから、ホントはた迷惑な一味だ」

「まぁスカッとしたけどな」
げんなりした様子のシャチと爽快そうに笑うペンギン。二人の言い分はたぶんこの島にいる人々の総意であるように思う。
「とはいえ、シャチの言う通り厄介なことになってる。なんせコーティングを終えるまで俺たちはこの島から出ることは出来ないからな。ロー、そこら辺どうなってる」
「職人さんの話だと、あと二日は欲しいとのことよ。それまではサバイバルね」
「キャプテン、俺もう疲れた」
ベポが手を上げながら言う。まぁさっき頑張ってたもんな。
「そうね、それじゃあひとまず休みましょう。どこか――――」
「船長あぶねぇ!!」
ローの背後から高熱の閃光が放たれた。とっさの判断で致命傷は避けられたが、少しかすめたらしい。すぐさま彼女は怪我の処置をし、下手人の方を向く。
「トラファルガー・ローおよびツバメ、発見」
無機質な声でこちらに照準を定めるのは、先ほど潰した筈のバーソロミュー・くまだった。
「なんでだよ!!　さっき倒した筈だろ!!」
「違う、あれとは別よ」

残念ながら詳細は憶えていないが、あれは確か海軍の作り出した兵器だったはずだ。量産化こそされているが、一体だけでも生半可な海賊じゃあ太刀打ちできない戦力を有した、いわば格下殺しのプロだ。実際ただの刀剣や銃弾では傷一つつけることすら出来ない。だが――

「一人だけで来たのは間違いだったな。俺たちを潰したいんなら、あと五体は持ってくるべきだ」

「同感ね」

「お二人が強いだけなんだよなぁ」

この時点で覇気意思の力とも。見聞色と武装色、覇王色の三つの覇気が存在するを体得してるのは俺とロー、そしてベポのみ。そして覇気を扱うことが出来れば、あの鋼鉄の体にも十分なダメージが通る。新入りのジャンバールはどうかしらないが、持ち前の巨体と腕力で覇気がなくとも十分な戦力になるだろう。

「それじゃあサバイバル開始だ」

★

「ガンマナイフ!!」

最後の一撃はローが持って行った。服がボロボロになり、むき出しになった機械はもはやただの鉄くずと化した状態でバーソロミュー・くまに似たサイボーグは倒れる。これで二体目だ。

理屈は知らないが、あれは内臓のみをズタズタに破壊する凶悪な技だ。食らえば大抵の生き物は死んでしまうため、本来であればあまり使わないのだが。

「とどめを刺すなんて珍しい」

ローは殺生をしない訳ではない。しかしそれを極力最小限にとどめるのが彼女のスタンスである。言葉にこそしたことは無いが、クルーの皆は知っている。

「自我もなく戦うためだけに生み出された命なんて空しいだけよ」

「なるほど、せめてもの情けってやつか」

「そういうこと」

あたりを見渡すと随分と地形は変わっていた。あのサイボーグ、最後の方はヤケになってビームを矢鱈目ったら撃ってたからな。しかしそれだけ暴れてくれたのだ、そろそろ海兵たちがここに来てもおかしくはない。

「お前ら、まだ動けるか?」

「ああ、問題ねぇ。いける」

「俺たちは援護しかしてねぇからな」

「助かってるよ」
シャチもペンギンも十年前に比べれば随分逞しくなった。少なくとも先の戦闘について行ける程度には、彼らも強くなっている。だから迅速に次の行動に移れるのだ。
「どうするロー。直に海兵も来る。俺は休憩もかねて逃げることを提案したいが」
「そうね、そうしましょう。職人さんの邪魔はしたくないからなるべく５０番ＧＲ（グローブ）には近づかないようにしたいけれど、どこかいい場所知らないかしら？」
「行くとしたら１から２９番だがっ!!?」
何が起きたのか分からなかった。
一瞬、視界がぶれたと思ったら、俺は建物に頭から衝突していた。遅れてやってくるのは頭部ではなく腹部からの痛み。痛覚が烈しい悲鳴を上げ、その凄まじさたるや呼吸さえ許してくれない。
「ツバメッ!!」
「おーっとォ。無意識なのか、直前で後退してダメージを抑えたねぇ……」
現れたのは長身の黄色い偉丈夫。背に正義を纏いし海兵の頂点。その名を――――
「き、黄猿だぁ!!」
「懸賞金２億。『死の外科医』、トラファルガー・ローだねぇ？」
黄猿と呼ばれた男はローに目をつける。対するローは息を飲み、しかし負けじと笑み

を浮かべて睨み返した。

「……ここで海軍大将、マズイわね」

「主犯格の麦わらのルフィには逃げられてねぇ。なら共犯者の一人や二人、捕まえんとわっしらの顔が立たんのよォ」

まずい、ローたちが狙われた。奴の一撃を食らってみて分かった。今の俺達では勝てないと。

（……くっそ、動けっ!!　俺の身体……っ!!）

蹴られたのか、殴られたのか。とにかく一撃が大きい。不意打ちなのがいけなかった。しかし泣き言は言ってられない。奴は自然系（ロギア）の能力者だ。くまの時と違って覇気が使えなければ戦いにすらならない。

「よくも副キャプテンを〜〜〜!!」

ベポが黄猿の背後から蹴りかかる。しかしその足先が黄猿のコートに触れるや否や、ベポは黄猿に頭をいつの間にか掴まれていた。

「え?」

「オオォ〜、覇気使い。うっとおしいねぇ」

「やめなさいっ!!」

静止の声は空しく、そのまま黄猿はベポを地面に叩きつける。轟音と地響き。ベポは

そのたった一撃で、地面に直立しピクリとも動かなくなった。
「ベポっ!!!」
「嘘だろ……ベポの奴が、あんな、あっけなく……!」
「次はトラファルガー・ロー、君だねェ」
今度こそローに狙いを定める黄猿。完全に回復はしていない。だが奴は俺を倒した気でいる。なら今度はこちらの番だ。
「鳴燕絶(めいえんぜつ)!!」
初速にして最高速度。地面を瞬時に１０度蹴り、翼と揚力によって浮いた体は空気の壁をも破り、音すら超えん。その『音速』をもって居合のごとく短刀を抜き放ち、黄猿を切りつける。その筈だった。
「君が『鳴無(おとなし)』だったんだねぇ、名前は知ってるよォ」
完全な背後からの不意打ち、それに対応するのが海軍大将。
黄猿は俺の短刀を光の剣で受け止めていた。勢いを失った以上、力で俺が勝てるはずもない。そのように悟り、後退しようとするも退避が間に合わず、黄猿の指先から出たレーザーを膝に食らう。
「――――ッつぅ!」
「生身で音を超えたのは称賛するけどねぇ、わっしはそれよりも速い『光』。お前さん

に勝ち目はないよォ」

「……クソっ」

やはり、勝てない。ステージが違う。系統は違うが悪魔の実の能力は俺より完全な上位である。また覇気の練度や戦いの経験、その他いかなる観点から見ても俺よりも圧倒的に上だ。一合交えて否応なしに分かるこの強さ。

正直、絶望する。ここまで差があるとは思わなかった。

「ＲＯＯＭ」

「んんん？」

「シャンブルズ」

瞬間、黄猿がその場から消えた。代わりに黄猿がいた場所には小さな石が落ちてあった。ローの能力だオペオペの実はそのサークル内にある物質を自由に操作、移動させることが出来る。

「……わりぃ、助かる」

「気にしないで。島全体を一瞬だけＲＯＯＭで覆った。今頃アレはここから一番離れた場所で混乱してるでしょうけど、稼げる時間は少ない。さっさと逃げるわよ」

「あ、アイアイキャプテン!!」

「ジャンバール。ベポを担いで」

「あ、ああ。分かった!!」
ローの活躍により、一時的に時間を確保できた俺たちは即座に逃亡に走る。場所は決まってないが、一刻も早くこの場から逃げなければならない。それなのに、また現れた。
「おいおい。パシフィスタを2体もやった上に、オジキからも逃げ遂せようってか。億越えってのは中々歯応えあるやつが多いな」
立ちはだかるのは鉞を担いだ大男。その後ろにバーソロミュー・くまの量産型もいる。
「……一度しか言わないわ。どきなさい」
「わいは世界一ガードの固い男、戦桃丸。ここは通さねぇよ」
「そう、ならこうするわ」
オペオペの能力により、彼女は俺達と眼前の奴らの位置を入れ替えた。そして、すぐさま俺たちは逃亡する。こいつらに足止めをされたら確実に黄猿が追い付く。そうなったらもうおしまいだ。
「追え!　ＰＸ――１!」
「貴方たちは先に行きなさい!　ツバメは残って!」
ローの指示にシャチとペンギンは頷く。ローは振り返り鬼哭を抜いた。船長命令故、俺もその場に留まって次の指示を待つ。

「私に合わせて、ＲＯＯＭ」
彼女を中心にサークルが出現する。何をするのかは分からない。だが問題なし。
「応さ」
飛び掛かってくるＰＸ―１と呼ばれた個体に、ローは鬼哭を構え、俺は獣人型に変態した。サークルにソレが侵入した時、
「切断（アンビュテート）」
ローが妖刀を薙いだ。彼女の斬撃、その延長上にあったＰＸ―１の首と胴体が文字通り切断された。
恐らくローの能力が如何なるものであるかを予めインプット、もしくは学習していたのだろう。ＰＸ―１はその別たれた首を何とか取り戻そうと空中で胴体が藻掻くが、なんてことはない。相手が黄猿でなければ俺が一番速いのだから。
「大空へ羽ばたけ!!」
誰よりも早くその首を奪い取り、そのままサッカーの要領で蹴り飛ばした。くまの首は流星の如く一直線に空を飛んでいき、でかいマングローブに直撃していった。これで暫くは動けまい。
「な、なぁっ、そんな馬鹿な!!　ＰＸ―１ンン～～～!!」
「逃げるわよ」

「ああ！」

「くそ、これで四体目だぞ!!　本当にパンク野郎になんて……って待ちやがれ!!」

鉞を担いだ大男がこちらを追ってくるが、その巨体と武器故に俺達の方が機敏に動ける。このまま逃げ切ることが出来る。

俺は獣人型から獣型に変態する。そしてローを背中に乗せ、ダメ押しに更に距離を稼ごうとする。

しかし、希望を抱いたとき、不運は訪れるものだ。

「さすがにそこまで大立ち回りされるのは、気に食わないねぇ」

絶望が、そこにいた。

シャボンディ諸島編６

「さすがにそこまで大立ち回りされるのは、気に食わないねぇ」
黄猿の無感情な瞳が俺たちを射抜く。鉞男も追いつき、臨戦態勢に入っていた。背後は鉞の男、正面には海軍大将。たったの二人で構成された八方塞がり。状況は非常に厳しいと言わざるを得ない。
「詰みだねぇ」
「それはどうかしら」
あくまでも、ローは不敵に努める。俺よりも見聞色の練度が高い彼女の方が、余計に絶望を感じてるはずだ。ならば俺も命を懸ける他ない。
「気丈に振舞うのは勝手だけどォ、さっきの技はもう食らわないよォ」
ローによるＲＯＯＭの展開速度よりも黄猿がこちらに接近する速度の方が断然速い。それは彼女にも分かっているはずだ。不意を突けたからこそ黄猿を埒外に出来たのであって、一度来ると分かっていれば奴は的確な対応をしてくる事だろう。
「馬鹿ね、そんな事分かってるわ」
彼女の言葉と同時に、景色が変わる。何もない平地だったのが、慌てふためく烏合の

衆が溢れる繁華街になっていたのだ。
「まさかお前」
「予めこの島全体にＲＯＯＭを張っていたわ。バーソロミュー・くま擬きを相手にしていた時から」
「無茶をするな」
オペオペの能力は集中力と体力を多分に消耗する。強力である分、必要とする医学知識は多く、また繊細な操作も要求される。つまるところＲＯＯＭという手術室に立つローは、さながらオペを執行する医者そのものである。故に島全体を覆うＲＯＯＭなど、維持するだけで大変なはずだ。
「だがおかげで助かった。さっさと――――」
「だから言ったでしょうにぃ。もう詰みだってぇ」
間の抜けた声。しかしその声が何よりも聴きたくなかった。
「……嘘でしょ？　いくら、何でも……早すぎる」
ローの驚きはもっともだ。光速であろうが何だろうが、俺達の居場所が分からなければそれが活かされることは無い。しかし現に黄猿は俺たちの位置を何らかの手段で掴み、こうして詰めに掛かっている。
「お前たちの抵抗は無駄だよォ。もうわっしが目を付けたんだからねぇ」

「シャンブルズっ!!」

黄猿が動くよりも先に、ローがもう一度位置交換に臨む。オペオペの実による位置交換は寸分のラグなく行われる。ある意味で言えば、オペオペの能力は光よりも速い。したがってローの体力が続く限り、逃亡は可能である。

今度は73番GR(グローブ)のホテル街。人は少ない。

「――――つく、ハァ、ハァ」

ローは既に疲労がたまっている。度重なる戦闘に加えて、超広範囲のROOM展開とその維持。聞くまでもなく、彼女の体力は残り僅かだ。

「あと何回できる?」

「4回。いえ……あと5回は」

「悪いな」

残された時間は少ない。俺はローが力尽きる前に、黄猿から逃げ切る方法を考えねばならない。

なぜ黄猿は俺たちの位置を特定するのが早いのか。これは一つ仮説がある。というのも単純な話で、黄猿と海兵の間で連絡を取り合っているからだと考えられる。人が多かった先ほどの繁華街にはもちろん海兵がいたことだろう。であれば黄猿も連絡を受ければ即こちらに向かってこれるし、逆に言えばこうして人の少ない場所に移動すれば

ほんの僅かだが時間が稼げる筈だ。
それはローも気づいた事だろう。だから俺が求められているのはその先。それを踏まえてどうすれば黄猿から逃げ切れるのか、だ。
「ちょっと……任せたわ」
「了解だ」
あてのない逃避行が今始まる。

★

「全く、腹が立つねぇ」
海軍の最高戦力、大将黄猿ことボルサリーノは非常に機嫌が悪かった。それは今回の騒動の主犯格である麦わらのルフィを捕らえられなかった事のみならず、同じルーキーのトラファルガー・ローを仕留めきることが出来ないでいる現状に対する苛立ちであった。むしろ、麦わらのルフィの時と違って自力で逃走している分、怒りの度合いで言えば彼らに対するモノの方が大きい。
「スポッターを即座に攻撃し、わっしが向かえば蛻の殻。ひよっ子にしては考えているねぇ」

業腹だが、『死の外科医』と『鳴無』は無能ではないと判断する他ないだろう。ただ隠れるだけであれば海軍の警戒網をやり過ごす事は決してない。しかし彼らは攻撃と逃走、そして隠密をうまく使い分けながら海軍の厳重な捜索から逃れている。

黄猿が彼らを追い詰めても、トラファルガー・ローによる奇怪な移動法によって逃げられ、黄猿の部下が彼らを見つけたとしても『鳴無』によってすぐさま始末される。両者の連携は完璧と評価せざるを得ない。それは海軍が誇る最強の一角がたった二人の海賊に翻弄されている事実からして明白だ。

しかし同時に、この逃亡劇には終わりが見えている。

『ボルサリーノ大将!! 大将の仰る通り、トラファルガー・ローはもう動けないようです!! 奴らは今13番GR(グローブ)にいます!!』

部下からの連絡で黄猿は確信する。トラファルガー・ロー、彼女の能力には限界があるという事を。もし彼女の操る能力が無制限に行使できるとすれば、スポッターを排除する必要はあまりない。それどころか、この島から離れたもっと別の地点に移動すればいい。

しかし彼女達はそうしない。そこには理由があり、そしてそれが距離制限であると黄猿は看破した。またトラファルガー・ローが展開する島を覆うサークルが縮小しつつあるという事実も、彼は見逃さなかった。

故にこの児戯に等しい逃走劇はそう遠くないうちに終わる。それが今だ。
「八咫鏡」
光速で向かうのは部下の報告にあった１３番ＧＲ（グローブ）。そこには――――
「君よりも、君の船長の首に用があるんだけどねェ」
ハートの海賊団副船長、『鳴無』のツバメのみがいた。
「船長は今ちょっとお疲れでね、用件があるなら俺が伺おう」
「小僧、調子に乗ると死ぬよォ」
生意気にも睨みつけてくるルーキーに己の語気が強くなるのを感じる。この餓鬼はあろうことか海軍大将を相手にして時間が稼げると、そんな夢を見ているのだ。
「死なないさ、そういう約束だ」
「なら破って死ぬといいよォ」
故に、黄猿が容赦することは無い。

★

ローによる９度目のシャンブルズ。限界などとっくに超えているというのに、それでも彼女は己の能力を使い続ける。しかしその代償は己の寿命だ。

彼女の心臓から、いっそ壊れてしまいそうなほど激しい警笛が伝わってくる。いつものガラの悪い瞳は朦朧としており、焦点はまるで合っていない。俺の肩なしじゃあ歩くこともできない様で、それでも彼女は「やれる」だの「まだ」だのと虚ろに宣う。

「馬鹿野郎っ!! もう無理だ!」

「……ま、だ。や……る」

俺の警告などまるで取り合ってくれない。いや、彼女はまだ俺を信じてくれているのだ。俺がこの状況を打開する事を。

「畜生っ!!」

試せることは試した。しかし全て時間稼ぎにしかならなかった。逃げようが、襲おうが、隠れようが、何をしても黄猿はこちらを捉えて逃がさない。

奴は全力で俺達を追っている。否、俺達だけを狙っている。何故かは知らないが、黄猿がこの島から俺達を逃がす気がないのは明らかだ。海軍大将に狙われて逃げ延びられる海賊などどれほどいる事か。そして本当に情けない話だが、俺一人の力ではどうしようもない。

ただ救いの神はいるらしい。この島には唯一、あの黄猿に対抗できる男がいる。そしてその男は今、俺の目の前にいた。

「――――ふむ、確か君たちは人間屋（ヒューマンショップ）にいた……」

「はは、奇遇だな。レイさん」
彼の海賊王率いるロジャー海賊団副船長、『冥王』シルバーズ・レイリー。そういえば、ここは13番GR（グローブ）だったな。
「随分と草臥れているようだが、どうした」
「あんたに、ローをウチの船がある50番GR（グローブ）まで運んでもらいたい」
「唐突だな」
そんなの百も承知だ。海賊なもんで。
「俺も、ローも、まだ弱い。だから、この様だ」
「そうか、黄猿か」
すべてを悟ったように、シルバーズ・レイリーは独り言ちる。話が早くて助かる。
「そうだな、全てはハチを守るためにルフィ君がしでかしたのが原因だ。ちょうど今はフリーでね。手を貸すのも吝かではないが、君はどうするつもりだ」
「俺は残る」
「勝ち目がないのは君が一番良く分かっている事だろう」
そうだな。今の俺じゃあ逆立ちしたって奴には勝てない。しかし何も、玉砕したくて残る訳ではないのだ。
「アンタなら、この島にいる全ての海軍の目を出し抜いて、ローを運ぶことが出来るは

ずだ。だが黄猿は追ってくるだろう。どこに船が停泊してるかバレちまったら、それこそ御仕舞なんだよ」

「……なるほどな」

黄猿が彼を見失えば、それでいい。俺が残るのはその時間稼ぎだ。

「今にも、黄猿は来る。だから頼む。急いでくれ」

「なぜそこまでする。船長とは言え、所詮は他人だろう？」

どうして聞くのか。そんなの決まってる。

「船長をたてられない副船長なんざ、この世にいないだろうさ」

「――ハハハッ!!　確かにそうだ!!　引き受けよう！」

愉快そうに笑う伝説の男。面白そうで何よりだ。

時間がない。俺はローを彼に引き渡そうとすると、彼女の手が俺のつなぎを掴んだ。引きはがそうとしても、どこにそんな力があるのかビクともしない。

「放せ、ロー」

俺たちのやり取りが聞こえていたのだろうか。なら最初から俺の言うことを聞いてほしかった。俺が不甲斐ないのは認めるが、それにしたって無茶しすぎだ。

「……やめ、て。……同じこと、しないで」

分かってる。今から俺はローにとって一番残酷なことをする。それが分かるとも。

でも男には、引いてはいけない瞬間がある。
「ワリいな」
疲れ果て、呼吸すらままならない女の身体に拳を入れる。それで彼女はぐったりと、たった一発で意識を失った。
「いいのかね？」
「ああ、これでいい」
覚悟は出来てる。
「ああ、それと。これ、あとで渡しといてくれ」
そういって、俺は俺にとってかけがえのないモノを渡す。
「これは……いや何も言うまい。健闘を祈る」
「『冥王』に祈られたら、なんか本当にご利益ありそうだな」
「軽口を叩けるのなら十分だ。ではな」
「ああ」
そうして、レイリーはあっと言う間に姿を消した。なるほど、こりゃあ安心して任せられる。本来であれば俺の役目だったわけだが、代打が用意できただけでも及第点だろう。

「君よりも、君の船長の首に用があるんだけどねェ」

シャボンディ諸島編７

「そういえばロー、お前何で墨入れたんだ」
まだ私たちが北の海（ノースブルー）で仲間集めに勤しんでいた時の事。とある港町で物資を補給している最中、少し小休止していたところに彼は私の両肩に描かれたタトゥーに目をやりながら、そんな事を聞いてくる。
「特にこれと言った理由はないけれど、どうして？」
「いや別に、ただ何となく気になっただけだ」
そう告げると彼は呆気なく話を終えて、また作業に戻ろうとする。何故かそれが面白くないと、そんな風に感じたのだ。
「そうね、強いて言えば身体に何かを刻むって行為に憧れてたからかしら」
私が口を開くと彼はこちらに向き直り、「へぇ」と気のない返事をする。そして「じゃあ指の『ＤＥＡＴＨ』の意味は？」と聞いてきた。
「目を背けちゃいけない事でしょ？　医者としても、海賊としても」
「なるほどな」
彼は納得したのか「ふむ」と頷く。お互いぼんやりと海を眺めていた。するとふと、彼

は思いついたように口を開いた。
「でもどうしてハートを模したタトゥーなんだ？」
「それは……」
聞かれても少し困る。結局のところ全ては『かっこいいと思ったから』という、本当に何でもない答えになる。でも数ある絵柄からコレを選んだのにも、確かに理由があると思う。
「信念、かしら」
思いついた言葉をつぶやいてみる。
「信念？」
「そう、信念。私がこう在りたいっていう」
いざ言葉にするとしっくりくる。体に刻んだハートは色々な人たちから受けた愛、そして私からの彼らに対する愛と信頼を表しているものであると。だからこれは彼らに向けた私の意思表明。
「そういう意味で言ったら、このタトゥーは貴方にも向けられたメッセージって事にもなるのかしら」
「なんだそりゃあ」
「秘密。でもそうね、偉大なる航路（グランドライン）を一周出来るまで貴方が死ななかったら教えてあ

げる」
　直接言葉にして伝えると、どうしてか陳腐になってしまうような気がした。何より私自身も彼に向ける親愛が一体どういうものなのか分からないのだ。
「ふむ。なんだか要領を得ないが、ひとまずそのタトゥーは似合ってるよ」
「でしょう？」
「さて。そんじゃあまあ、そろそろ作業に戻るとしますかね」
「ええ」
いつの日かの、何でもない思い出。何故こんな懐かしい夢を見ているのだろう。

★

「……ここは」
目が覚める。体を起こすとそこが小さな酒場であることが分かった。カウンターで女性が食器を洗う中、こちらに背を向けて座る老人の男性はグラスを傾けていた。
「起きたかね」
後ろを向いたまま老人は声をかけてくる。声と風格ですぐに分かった。人間屋（ヒューマンショップ）に

いた――

「……あなたは、シルバーズ・レイリー」

「可愛いお嬢さんに名を呼ばれるのは何時ぶりかな」

「ここはどこ」

「13番GR（グローブ）にある、しがないBARだよ」

彼がそのように言うと、奥の女性が呆れた顔をする。恐らく彼女が店主なのだろう。

「ツバメは」

「一人で黄猿に挑んだよ」

「そう」

知っている。彼は最後に私を殴って黙らせ、その挙句一人で死にいった。おかげで私はここにいる。

「……世話になったわ」

鬼哭を持ち、店を出ようとする。私がすべきことは決まっている。

「まぁ待ちたまえ」

「……何？」

「外にはまだ海軍がいる。黄猿は既にこの島から発ってはいるだろうがね」

「なら急がないと」

か細く、今にも止まりそうな鼓動が胸を鳴らしている。彼はここから遠く離れたところにいる。方向は何となくわかる。なら後は向かうだけだ。
「だから待ちたまえ」
男の声音に険しさが入る。しかしなぜだろう、まるで恐ろしく感じない。
「……何かしら？　急いでいるのだけれど」
「君が何をしようとしているのかは私にもわかる。大方、護送されたツバメ君を救い出すという算段だろう？」
分かっているのなら早く行かせてほしい。こうしている間にも彼は、本当に取り返しのつかない場所に行ってしまう。
「ツバメ君は黄猿により直接インペルダウンに引き渡される」
そんな事、言われるまでもなく分かっている。だから私はその前に彼を救出する。
「彼の事がそんなに大事かね」
大事か、大事でないか。そんな領域の話ではない。少しうるさい。
「君ではどう足掻いても黄猿には勝てない」

うるさい。

「彼一人の命で君は助かったのだ。幸運だったな」

うるさい。

「どの道ここで敗北するような男では、新世界の猛者たちと張り合う事など、とてもとても」

「うるさい!!」

鞘を抜いて切りかかる。しかし刃は途中で止まってしまった。他でもない、この目の前の老体に二本の指で止められたのだ。

「離しなさいっ!!」

「彼は君を救うために命を差し出したのだ。その覚悟を君が踏みにじるのかね」

「覚悟?　覚悟ですって?」

そんなの覚悟でも何でもない。私が自分が死ぬ事よりも恐れていることを彼はやった。私の全てを知っているうえで、それでも私を残していくというのなら。

それは許されることではない。私に対する最大の冒涜だ、最悪の裏切りだ。一人で死

なせるくらいなら一緒に死んでくたばった方が良かった。勝手に死ぬのなら私がこの手で殺してやる。

「彼は、私の命よ。彼が死ねば私も死ぬ。だからこのまま死なせるくらいなら、私が殺す」

「……君は化生の類だったか」

「化け物で構わない。それで彼をどうにか出来るのなら」

死なせたくない。だから助ける。でも死んでしまうのなら、いっそ死ぬ。

過去に、私に人生を与えてくれた人がいた。その人は死んでしまったけれど、私に生きることを教えてくれた大恩人だ。そしてその生まれたばかりの人生に、いつの日か陽だまりを差し込んでくれたのは彼だった。

いつも私の隣にいてくれた。それでいて半歩引いたところから見守って、背中を守ってくれる人だった。間違った事をしそうになれば、忠言してくれる人だった。だから私は海賊でも、畜生に身を落としたことは無い。しかし今はもう、畜生になろうが、化け物になろうが、その事を正してくれる人はいない。

「依存してる事なんて百も承知よ。でも彼は許してくれた。間違いではないと、言ってくれた」

人は一人で生きていけない。依存できる相手がいるだけでも上等だと。彼はこの醜

い感情を余すことなく笑って受け入れてくれたのだ。
「私は行く。私のモノを取り返すために」
世間から見れば私は間違っているのだろう。でも彼が許してくれるのなら、私は私に素直になる。助けたいから助ける。殺したいから殺すのだ。なぜなら、彼は私のモノなのだから。
「ここに、君の命があったとしてもか」
男はキューブ状の枠に包まれた心臓を見せる。その鼓動からすぐに私のモノであることが分かった。しかしそれが何の意味があろうか。
「それは彼にあげた私の心臓よ。だから彼がそれをどう扱おうが、私の知ったことではない。あくまでも私はツバメという、彼そのものを取り返したいだけ」
私が彼を好きにしていいように、彼も私を好きにしていい。でなければこの関係はなり立たない。一方的な想いなど、そんなものは刹那的にしか在り得ないのだ。
心の底から出た言葉に冥王は久しく固唾を飲み、目を閉じた。
「……そうか。もはや情愛などでは済まないのだな、君たちの関係は。ならばこれは君に渡すべきなのだろう」
「どうして？　ツバメはあなたに預けたのでしょう」
「彼から君に渡せと言付かっている。君の言う通り、これが彼の心臓であるのなら、君

に渡すのが道理という物だろう」
そう言って、彼は心臓を差し出してくる。
「……そう」
約十年ぶりの己の心臓を見ても、何の感慨も抱くことがない。どうせなら彼の心音を聞いてた方が安心する。
それを異常とするのなら、それは間違っていないのだろう。否定はしないし、するつもりもない。しかしそうさせたのは彼だ。
「責任は、きっちりとってもらうから」

シャボンディ諸島編８

――どうしてまだ立ち上がろうとするんだろう。

無様に地面に這い蹲る俺は、両足に力を込めながらそう思う。左肘から下の感覚は既に失っており、右目は潰れてしまったからかその機能を果たしていない。立っているだけで億劫なのに、それでもそうすることには理由があるはずだ。

残った目で見据えるのは海軍大将。残念ながらぼやけた視界ではそいつの表情は読めない。だが、きっと面白くは感じてないだろう。なんとなくわかる。俺だったらそう思う。

ひゅん。

痛覚は十分に働いていないが、それでも今自分が蹴り飛ばされた事くらいは分かった。痛みを感じる暇もなく追撃が来る。なんとなく己が焼き鳥になる未来が見えて、致命傷を避けるべく両翼を無理やり動かした。お陰でまた情けない格好でぶっ倒れる。

「――――」

男がまた何かを言っている。だが悲しいかな。今の俺に雑音を聞いてられるほど余

裕はないんだ。

未だに動いてくれる足を使って、もう一度大地に立つ。いい加減、倒れた方がいいのに。十分に時間は稼いだろうさ。誰も責めやしない。

奴が背後に回り俺の脳天を砕く気がした。急いで頭を下げると、顔面に拳が飛んできた。僅かに顔を逸らす事ができたのか、思ったよりも吹き飛ばされる事はなかった。その代わりに元から潰れてた顔が更に醜いことになった。たぶん。

「……み、える」

少しづつ、少しづつ。敵の動きが見える、否分かる。視界が朧気であろうとも、鼓膜が破れて音が聞こえなかろうと。むしろだからこそ、分かるのだ。

第六感が研ぎ澄まされる。この世界において、練り上げられたソレを覇気、特に見聞色の覇気と言う。そして己より数段格上の覇気使いと相対すると、人は覇気をより深める事が出来る。

今、まさに俺はその状況にあった。

右手に持つ短刀を構える。俺はなぜここにいるのか。時間稼ぎのためにこの場にいるのか？

「……ちガ、う」

勝つ気でいる。これっぽっちも負けるつもりはない。

相手が何であろうと、この先の海を生きていくには強く有らねばならない。新世界に跋扈する海賊どもは強力で無慈悲だ。だから、こんな海軍の兵士一人に敗北するようではこの先思いやられる。あいつの命を預かるには、無敵でなければならない。

――――俺はこの戦いを経て強くなる。

要するに俺の反応が光を超えればいいだけの話だ。相手は光の速度で移動してくる。ならばこちらはそのことを弁えた上で動けばいい。理屈はシンプル。動きは最小限。相手は光。攻撃の手段の殆どが点か線だ。

レーザーによる下半身への攻撃。僅かに足をずらすことで回避する。

光の速度で移動した後に上段蹴り。姿勢を低くすることで回避する。

高熱の剣による光速の連撃。武装色を込めた短刀で受け流し、また身を捩って回避する。

何をしてくるのか感覚的に、しかし明瞭に理解できるのに体がついていかない。何をどうすれば相手の攻めを完璧に凌げるのか分かるのに、体が思考に追いついていないのだ。だから致命傷を避けることは出来ても、決して小さくはないダメージをもらってしまう。

かなり追い付いている。しかしまだ足りない。もっと研ぎ澄ませ。光よりも速い未来を見ろ。

「――――っ!!」

黄猿が動く。視認さえ許さぬ拳が眼前に迫るのが見えた。間に合わない事を承知の上で首を傾け、そして同時に右足を薙いだ。

頬骨が砕ける音を聞き届ける。しかし全く同時に足先から確かな感触を得た。その証拠に俺はまたも不細工に地面に叩きつけられたが、そこから黄猿の追撃が来ることも無かった。

――――光を捉えた。

この戦闘になって初めて、俺は黄猿に触れる事が出来た。大局的に見ればそれは取るに足らない小さな一歩。しかし、今、確実に、俺は一つ上のステージに立った事を自覚する。

見聞色の昇華、未来予知。その片鱗を今、体得せん。

片目を閉じる。浮かんでくるのは光速の軌道。その線をなぞるように、俺は短刀をふるう。すると手ごたえを感じた。無論、俺も蹴り飛ばされて瓦礫の山に突っ込んだ訳だが。

――――血だ。

俺のではない。俺の所持する刃物に血液が付着していたのなら、それは俺と相対する敵のモノであって然るべきである。故に間違いなく、俺は黄猿を斬りつけた。ようやく

見えてきた成果に、喜びで口角が上がりそうになる。すると、

「ゴ、っが」

口からびっくりするほど血がこぼれた。

「……あ、れ？」

意識は朦朧としていた。あまり考えないようにしていたが、左腕は消し飛んでいた。右の眼球も完全につぶれている。とっくのとうに、死に体だった。

「つぶ、ず」

今更のように視界が赤く染まっていく。気づくと膝をついていた。その間にも黄猿に斬りつけられる未来が脳裏に浮かんだ。一刀両断される。しかしだというのに、体は全く動いてくれそうにない。

ああ、まずい。これはどうしようもない。

『――――』

とても大切な、とある女の姿を幻視した。

「ガあああアアアアアアッッ!!!」
短刀を後方に投げつける。眩い光を放つ刀剣を今にも振り下ろさんとしていた黄猿の胴体に、その短刀が刺さることはない。ただ無情にも通り抜けるのみだった。
「いい加減、くたばりなよォ」
それで、ぷつりと。電源を切ったテレビのように。終わった。

★

海軍大将、黄猿ことボルサリーノは眼前の血だまりに倒れる男を凝視していた。
戦闘は約３０分にも及んだ。正確には戦闘とも呼べぬ蹂躙だったわけだが、この男はボルサリーノの熾烈な猛攻に見事に食らいついたのだ。決して、ボルサリーノは全力を出してはいない。しかし油断も慢心も、ましてや手を抜いたつもりもなかった。
『鳴無』は確かに、この戦闘を通して劇的な進化を遂げていた。
「恐ろしいねぇ、この若さ」
頬に浅く刻まれた刀傷。そこから幾分か流れる血液が、男の成長を物語っている。しかし――――
「それでも弱くっちゃあ、しょうがないねぇ」

海軍大将の肩書は伊達ではない。未だ前半の海で燻るルーキーが挑むのも烏滸がましいほどに、ボルサリーノと彼の間には圧倒的な差があった。それをいくらか詰めたところで、勝てる見込みが生まれる訳でもなかった。

だがある意味、『鳴無』はこの戦いに勝利していた。ボルサリーノ自身もそのことを自覚している。

「トラファルガー・ローは完全に見失ったみたいだねぇ」

あくまでも『鳴無』は囮。本命の船長の方は姿を消している。ハートの海賊団に危険性を見出していただけに、此度の結果は芳しいとは言えない。そのことに態度こそ示さないが、一抹の苛立ちを感じる。してやられたと。

とはいえ、海兵が海賊を仕留めたのならするべきことは決まっている。

「海賊『鳴無』のツバメ、お前をインペルダウンに護送するよォ」

海賊にとって、あるいは死刑よりも重たい宣告だった。

インペルダウン編１

ここは数多の海王類が住まう凪の海（カームベルト）に位置する、世界政府が誇る海底大監獄『インペルダウン』。

入獄した囚人らは当然の如く手枷と足枷をはめられ、手始めと言わんばかりに摂氏１００度の拷問、『地獄のぬるま湯』にぶち込まれる。俺と同じく海軍に捕縛された同業者たちは壮絶な悲鳴を上げ、中には溺死しかける者もいた。無論俺である。能力者だからな。

次に防寒具として何の機能を果たさないであろう薄い囚人服を着せられ、痛覚が悲鳴を上げるほどの極寒に放り出された。左腕は失ったからか、足枷のみかけられた状態で。火傷したばかりの皮膚は冷やすのが適切と言えど、限度と言うものはある。つまるところ凄まじく寒い。死ぬ。

前述したとおり、インペルダウンは世界政府が保有する世界一の監獄である。また場所の都合上、凶悪な犯罪者ほど下の階に幽閉される。そんでもって俺がいるのは地下五階の『ＬＥＶＥＬ５』、通称〝極寒地獄〟。一時期雪山で過ごしていた俺でさえ厳しいと感じるのだから、数か月もしたらたぶん死ぬだろう。

さて、そんなわけで割と絶体絶命の窮地に立たされた俺だが、実は意外と余裕である。いや、正確にはつい先ほどまで気が気でなかったりしたのだが。

「おい、生きてるか。麦わら」

「ハァ……ハァ、いでぇ……」

看守に汚物を扱うように連れてこられたのは麦わら帽子を被った青年、モンキー・D・ルフィだった。彼は全身を毒々しい紫色で彩られており、実際毒に塗れている。どうやら彼は立ち上がることすらできないようで、翼をもがれた鳥のように喧しく呻いては転んでいた。

「なんだ、お前こいつと知り合いなのか?」

「まぁね。俺がここにいる原因」

同じ房仲間である大男の質問に答える。口ではこう言ったが、恨み自体はあまりない。むしろ少し感謝すらしている。

「が、ぐ、うあああああぁぁぁぁ!!!」

体を大きく痙攣させながら麦わらは叫喚する。このまま放置したら、医者でなくとも数時間後には命を落とすだろう事は分かる。ハートの海賊団に所属する俺としては、今すぐにでもローに診せてやりたいところだ。しかし、この様子だと仮に彼女がこの場にいたとしても意味はないのかもしれない。

「死ぬな、こいつは」
栗頭の男はただ単にそう告げた。同感である。
「まだだ!!　俺はまだ死なん!!」
今にも力尽きそうな体を起こそうとする姿はあまりにも痛ましい。いっそ死んでしまった方が楽になるだろうに、それでも彼の目は死んでおらず闘志に燃えている。
「エースを助けるまでは……俺は、死な〝ねぇ!!」
「友達か何かが捕まったのか？　なんにせよ、それでテメェが死にかけてるんだから世話ねぇな」
囚人の一人が言う。悲しいが彼の言う通りだ。麦わらの気持ちはわかるが、それで自分が死ぬんだったら意味がない。ああ、まったくもって耳が痛い話だ。
「はぁ、ホントに」
囚人服を脱ぐ。どうせ防寒具としてなんら効力を示さないんだったら、この布で目の前の重症者に付着した毒を少しでも拭ってやった方がよっぽど有意義な使い方だろう。まぁ、脱いだらやっぱり寒かったが。
「新入り、お前何してるんだ」
「応急処置」
「死にかけのそいつに、テメェの服をくれてやる理由がどこにある」

「ただの親切心だよ」
理由は特にない。もっとも、この応急処置が実を結ぶ可能性は限りなく薄いが。
「オ、まえ」
「あんまり喋らない方がいい。あと動くな」
皮膚についていた毒は粗方拭き終えたが、体内に及んだ毒素まではどうしようもない。死ぬその瞬間まで安静にしていることが彼の残り少ない寿命を縮めない唯一の方法だ。できればそうしていてほしいが、体に纏わりついていた神経毒がなくなったおかげで少しだけ元気になったのか、麦わらはまた立ち上がろうとする。
「ほら言わんこっちゃねぇ。そいつに何したって無駄だ。ただのアホなんだよ、そいつは」
栗頭の囚人がそう指摘する。何も否定できない。
「……まぁ、確かに阿呆だな」
しかし、ただのアホなら今日まで生きていられる筈がない。俺は知っているのだ。
「麦ちゃん……!!! 助けに来たっ!!!」
彼が、少なくとも一つの物語の主人公に足り得る事を。

海楼石の檻の向こうで、こんな極寒の中で何故か半裸の変態が血まみれで立っていた。俺も人の事は言えないが、それはそれ。

「お前は、なんだ」

「友達(ダチ)!!」

ボロボロの身体を引きずりながら、その変態は牢屋のカギを開けた。彼はそのまま持っていた鍵を投げ捨て、麦わらを持参してきたソリに乗せる。無論、俺はすぐさま鍵を拾って自身にかせられた足枷を外した。

「おい新入り、まさかテメェ」

「脱獄する」

食い気味に返答すると、先輩方は口を閉ざした。変態さんの方を向くと、警戒しているのか独特の構えをしていた。実力的にはそこまで低くないのだろうが、覇気の感触から右目と左腕を失った俺でも難なく打倒できるのが分かる。

「……アンタは、何？」

「そいつとは少し縁があってね。義理はないが助けてやりたい」

こいつが死んだらローの本懐を遂げることが出来ないかもしれないし。理由なんてそんなもんだ。物分かりがいいようで、変態さんは小さく「ありがとう」と声を漏らしていた。

「で、助けに来たって事は、何かしら救う算段があるんだろう？」
「え、ええそうよっ!!　アナタ、エンポリオ・イワンコフという人知らないかしら!?」
原作知識でも知っているが、それ以上にこの世界における有名人だ。もちろん知っている。
「ああ、確かここに幽閉されてるって聞いたな」
「そう!!　その人なら麦ちゃんを助けることが出来る!!　奇跡の人よ!!」
「そ、そうか。ただ生憎、俺はどこにいるか知らないな。アンタたちは知らないか？」
手枷足枷だけは外したらしい房仲間たちにも問いかけてみたが、彼らも知らないとのこと。まぁそれもその筈だろう。
娯楽も何も許されないインペルダウンだが、実は一つ怪談がある。それは『鬼の袖引き』という、囚人が何の前触れもなく消える現象だ。そしてイワンコフはその現象によって忽然と姿を消した、という事になっている。
「となると地道に探すしかないな」
俺の言葉に、変態さんは「分かったわよーん!!」と独特な口調で返す。

★

「キャプテーン!!　本当に一人で行くのか～！」
「ええ、船は任せたわ」
「俺達も副キャプテン助けに行きたいぞー！」
「気持ちはわかるけれど、そしたらこの凪の海（カームベルト）で誰が船を守るの？」
「う～ん、でも～」
「任せなさい。私がしっかり連れ帰るわ」

インペルダウン編２

「ちょ、ちょっとナニよこれー!!」
大声で叫ぶのは例の変態さん、もといボンちゃん（本人がそう呼んでほしいとのこと）。バレリーナのように何回も回転する様はさながら大道芸人である。
「たかだか狼が群れを成してるだけだろ」
俺とボンちゃんの前に立ちはだかるようにして現れたのはちょっとやばい目つきをした狼の群れであった。とはいえ、ただの獣畜生にしては統率が取れているようにも見える。油断は禁物だ。
「あんの囚人どもめ～!!　あちしたちを騙したわね～い!!」
一人の囚人がここいらで怪しい人影を見たという証言の下、エンポリオ・イワンコフを探していた俺達はいかにも危険そうな針葉樹林に訪れた。結果は御覧の通りだ。気づけば俺たちは囲まれていた。
「そりゃあお前、人様に優しく出来る奴がこんなところにいる訳ないだろ」
「ン～～～!!　でもこんな犬っころ相手にしてる時間なんてないわよ～～ん!!!」

まだ一時間程度の付き合いだが、この人本当に無駄にテンションが高くて鬱陶しい。焦るのは分かるがもっと落ち着いてほしいものだ。そのウザさたるや、こんな冷凍庫みたいな場所にいるのに何故か暑苦しく感じるほどである。

ただまあ、こんな地獄みたいな場所でも我を貫き通せる精神には敬服する。ある意味心強い。

「ボンちゃん、お前は麦わらを頼む」

「りょ～かいよ～ん!!!」

武器はないため徒手空拳で臨むしかないが、十分だろう。狼の数は１００を超えている。戦闘が長期化するのは望ましくない。したがって俺が遊撃して、さっさと終わらすのが最善だろう。

麦わらを乗せたソリを引くボンちゃんの前に俺は立つ。すると同時に、狼の集団は一斉に飛び掛かってきた。

「燕撃（えんげき）・赤狼（せきろう）」

空中に身を躍らせる。そのまま身体を捻り、独楽の要領で高速回転。正面、および側面の畜生どもを文字通り蹴散す。耐久力はあまりないようで、たった一撃で骨を砕く感触を得る。それが九つ。まだまだ数は有る。

今の一連の流れで脅威を感じたのか、狼の過半数がこちらに狙いを定めたらしい。好

都合だ。

着地すると同時に近くを駆けていた狼の首根っこを掴み、そのまま折る。物言わぬ亡骸となった畜生を他の個体に投げ、背後から飛び掛かってきた狼を振り返りざまに地面に叩きつけた。無論首はへし折る。

「さ、流石『ＬＥＶＥＬ５』の囚人っ!!　伊達じゃないわねぃ!!」

ボンちゃんの方に僅かに意識を向けると、向こうもどうにかこうにか狼の襲撃に対応していた。見た感じ、フォローさえしっかりすれば問題なさそうだ。少なくともタイマンで彼があの狼に後れを取ることはないだろう。

狼たちは相当飢えていたのか、目の前の同胞が次々に絶命しようとも構わずに向かってくる。また最初に感じた通り、この狼の群れは中々に統率が取れている。まるで軍隊のように。おかげで俺達は未だに包囲網を突破できずにいた。俺一人ならこんな畜生らの包囲なんてすぐに振り切って見せるのだが、さて。

「どこかに指揮してる個体がいると見た」

闇雲に殺してもしょうがない。相手が軍隊なら指揮官を潰すの定石である。襲い来る狼を蹴って殴って首をへし折りながら、俺は周囲を見渡す。遠くで俯瞰する、とりわけ強そうな個体はいないものか。

「――――いた」

他の個体よりも一回り大きい狼が、集団の奥でふんぞり返っていた。根拠はないが、アレがこの群れの長なのだと直感する。覇気ってほんと便利。特に見聞色は黄猿との戦闘を通じてかなり上達している気がする。

獣人形態に変態する。腕が一本不在なのと辺り一面吹雪いているためバランスは取り辛かった。が、空は飛べた。そして飛行できるのなら後は早い。

「燕撃（えんげき）・灰被り（シンデレラ）」

初速にして音速。空気を壁として蹴りだせる程にまで発達した爆発的な脚力は、飛行に優れたツバメの翼と組み合わせることで継続的にその速度を可能にさせ、更に加速させる。数値にしてマッハ２。音速の約二倍である。

狭い牢獄の内で過ごしてきた犬畜生どもにとって、ソレは見たことも無いだろう。物体が音より早く駆ける事で生じる衝撃波も、それによるソニックブームも。

いかに統率力があろうとも、いかに数を揃えようともアレらはただの獣。常識に縛られたまま自然で生を甘受する彼らにとってみればある意味、天災にも等しい一撃。矢の如く降下する男の先から、凄まじい衝撃と爆音が轟いた。その凄まじさたるや、男を囲っていた狼の群れは塵芥のように掻き消え、辺り一面に生えていた樹木も揺らされ根元を剥き出しにさせる。

さて、そんなとてもとてもすごい速度で蹴られた狼はどうなるでしょう。

「こりゃあミンチよりもひでぇや」
血肉に塗れた足先に目をやりながら、そのようにつぶやく。統率者がいなくなったという事実に加え、今眼前で起きた惨劇を前にして狼の群れは震え逃げていく。
振り返ると、あんぐりと口を開けて地面に手をつくオカマが一人。どうやら彼も吹き飛ばされたようで、たっぷり時間をかけて状況を把握した後、こちらに詰め寄ってきた。
「あ、アンタねぇ!!　大技使うならやる前に言いなさいよーん!!　びっくりしてあちし何十回も回ったじゃなぁ〜〜い!!　ジョ〜〜ダンじゃなーーいわよーう!!!」
やはり喧しいボンちゃんがビシビシと叩いてくるが、表情を見る限り喜んでいることが分かる。
「悪かったって。それより麦わらは———」
「流石は世間を騒がすルーキーの一人。中々の実力だ」
「んあ?」
サングラスの男が一人、俺達の背後を取るように立っていた。彼は厚手のロングコートを着ている。ちょうど真ん中を割るように黄色と白で配色されたソレは、流石に看守の物ではないと分かる。
「お前、誰だ」
「私はイナズマ。君たちを助けに来た」

★

「そ、そんな夢みたいな話があるのっ!!」

目玉が飛び出そうなほどボンちゃんは驚き、その勢いのまま回転し始めた。意味不明である。

イナズマ、そのように名乗った男も俺達と同じく囚人であるという。彼が言うには、この先にインペルダウンの囚人たちが築き上げた楽園があるという。山のような飲食料、チェスやオセロを始めとした娯楽品、銃や刀などの古今東西のありとあらゆる武器防具。とにかく何でもあるらしい。彼の奇抜なファッションもそこからきているのだろう。

さて、そんな楽園の名は『ＬＥＶＥＬ５．５番地、囚人たちの花園、ニューカマーランド』。何ともまぁふざけたネーミングセンスだ。

「あー、一ついいか?」

気になることがある。先導するイナズマの背中越しに聞くと、彼は相当アルコール度数が高いのか何故か凍らないワインを飲みながら、こちらに顔だけを向けてくる。

「なんだ」

「この広い海だ。その楽園を在り得ないと断じるつもりはない。だが一体どうやって、この凶悪な犯罪者たちが集うインペルダウンの囚人たちを束ねているんだ？」

集団を纏めるには秩序とそれを敷く者が必要である。しかしソレらをものともしないのが俺達犯罪者、つまり海賊な訳で。中には話の分かる者がいるだろうが、大半は危ない奴ばかりだろう。だからこれは『ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ』の一読者として純粋な疑問だった。

「どうやら君には良識があるようだ。当然、運よく楽園に到達した囚人の中には凶暴な奴もいた。しかし、我らの指導者はそういった輩をも改心させる術を持っている」

「へー、面白いな。なんだそれ」

「私の口から言える訳がないだろう」

「そりゃそうだ」

まだ出会ったばかりの人間に自らのボスの能力を話すつもりはないようで、彼はその言葉を最後に正面に向き直り足早になる。まぁそんなに甘くはないか。むしろガードが甘くないことに安心する。どうもこの世界の住人は守秘義務を怠る人間が多いからな。

「それじゃあ、あちしからも質問。イナズマ、あなたエンポリオ・イワンコフというオカマ知らないかしら？」

一通り回転して満足したらしいボンちゃんは奇妙なステップを踏みながらそのように聞く。因みに現在麦わらを乗せたソリを引いているのはこいつである。さっきから回転してばかりだが、それで器用に麦わらを運んでいるのは素直にすごいと思う。いや、本当にまったく無駄な動作なのだが。

「知ってるも何も、私たちの主導者だ」

「え、え～～～!!」

イナズマの返答にまたもや目玉が飛び出そうになるボンちゃん。もう見てて飽きない。イロモノすぎる。

「詳しい話は本人から聞くといい」

「え、ええ！　ツバメちゃん!!　あの『奇跡の人』なら麦ちゃんを絶対助けられるわよ!!」

ガバっとこちらに顔を向けて、ボンちゃんは本当に嬉しそうな顔をする。

「ああ、そうだな」

この先の展開を朧気ながらも覚えている俺としては少々複雑な心地になるが、一応笑顔を返しておく。するとボンちゃんはわなわなと震えて「急いでいっくわよーん!!」とイナズマを急かした。なんなら彼を追い越してクルクルと飽きずにまた回りだした。

「ところで『鳴無』のツバメ」

「うん？」
「君の船長はフレバンス出身だと聞いたが、本当か？」
「――――っ」
あまりに唐突過ぎて、息が詰まった。しかし顔には出てない、大丈夫だ。
「……悪いがそれは個人情報だ。どうしてもその話をしたいのなら、俺じゃなく本人にするといい」
イナズマ、彼は革命軍革命軍とは世界の変革を求めて世界政府とぶつかる一大組織であるの幹部である。そして革命軍の情報収集能力は凄まじいと聞く。だから恐らく、ローの特殊な境遇を知ったのもその優れた情報網からだろう。
「ふむ、それもそうだ」
「ただ一つ言っておくが、あいつは身内以外には相当ドライだ。世界の事なんて眼中にないと思うぜ」
「……なるほど。手強いな、君も」
「はは、アンタらほどじゃない」

★

「待っていて、必ず助けるから」

『ＬＥＶＥＬ４』から『ＬＥＶＥＬ５』へと降りるための螺旋階段を駆け下りるのは一人の女性。肩に長刀を携えた彼女の名はトラファルガー・ロー。己の半身を取り戻すため、ローは単身で地獄とさえ形容される監獄に挑んだ。

しかし世界一の監獄は伊達ではない。侵入すら困難であるはずのインペルダウン。その地下四階にまで至るまで、彼女はいくつもの幸運に見舞われた。

一つ目は侵入の折、監獄外に配置された軍艦の注意が七武海の一人である『海賊女帝』、ボア・ハンコックに向いていた事。二つ目は既にインペルダウンには侵入者がおり、加えてその侵入者は杜撰にもすぐに発見されて監獄内が大きく混乱していた事。そして最後の三つ目が――――

「彼の爪、保管しておいてよかった」

ビブルカードの職人がたまたまシャボンディ諸島に訪れていたという事。

別名『命の紙』とも呼ばれるソレは、人の爪の欠片から作りだすことが出来る。この紙はその爪の持ち主に向けて常に向かい続けるという性質を持っており、そしてローが持っていたのはハートの海賊団副船長の爪。つまり彼女は目的の人物がどこに幽閉されているのかをノーリスクで知ることが出来たのである。

そうした様々な幸運とオペオペの能力、そしてロー自身が持つ単独行動の心得が合わ

さり、今の今まで誰にも気づかれる事なくここまで辿り着くことが出来たのである。

「……あと、少し」

長い時間をかけ、ついに目的地に到着する。ビブルカードは平行に動いていた。

扉を開けると痛みすら感じるほどの冷気が吹きさす。お世辞にも防寒に優れた服装ではないが、歩を進めることに躊躇いはなかった。ただ一気に人体が凍えていくのを感じる。そういえば、先ほど上の階でたくさんの汗をかいた後であった事を思い出す。

「……早く、助けないと。彼、きっと、寒い思いしてる」

言いたいことはたくさんある。だけどそのためには二人とも生きて帰る必要がある。だからこんなところで倒れる訳にはいかない。